



文化財愛護
シンボルマーク

寺の前遺跡発掘調査報告書

1995年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は平成6年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した山代郷団地造成工事にかかる寺の前遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本発掘調査は有限会社松雲建設工業から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。

3. 調査の組織は下記のとおりである。

依頼者	有限会社松雲建設工業	代表取締役	雲山 採俊
主体者	松江市教育委員会		
事務局	教　育　長	諏訪　秀富	
	生涯学習部長	中西　宏次	
	文化課　長	中林　俊	
	文化財係　長	岡崎雄二郎	
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課		
	理　事　長	大塚　雄史	
	事　務　局　長	佐藤千代光	
	調　査　係　長	中尾　秀信	
調査者	調査担当者	瀬古　諒子	
	調　査　員	遠藤　正樹	

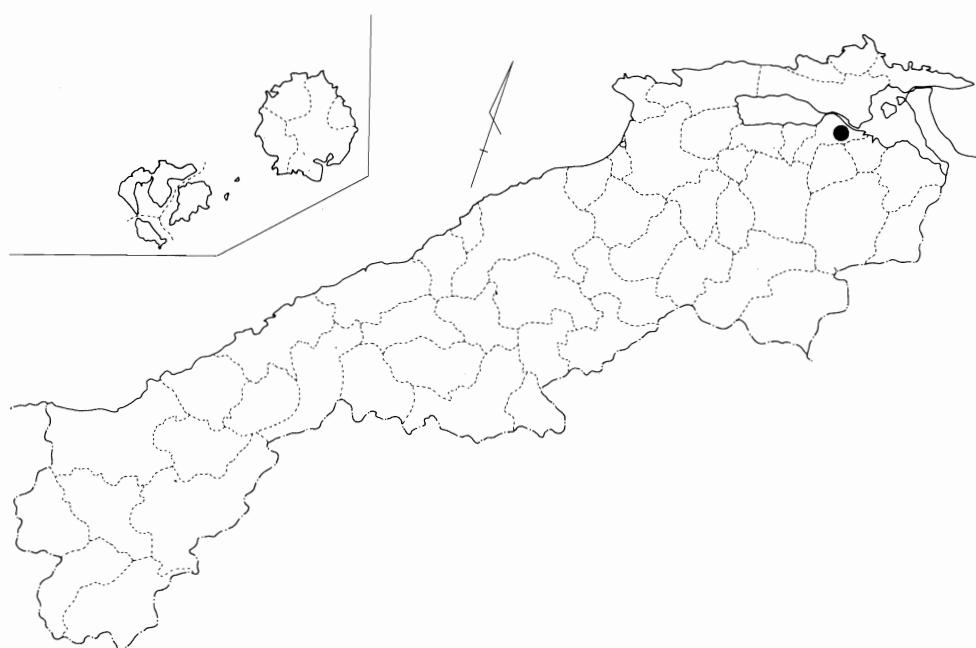
4. 調査の実施に当たっては、次の方々の指導と協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。
池田満雄（島根県文化財保護審議委員考古担当）、村上　勇（広島県立美術館主任学芸員）、今岡一三（島根県教育庁文化課主事）、広江耕史（同文化課主事）、山本　清（島根大学名誉教授）、三浦　清（島根大学名誉教授）、山本信夫（太宰府市教育委員会教育部文化課文化財保護係技術主査）、内田律雄（島根県教育庁文化課調査第4係長）、中村唯史（島根大学大学院生）（敬称略）

5. 出土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。

6. 遺物の実測及び淨書は瀬古、遠藤、江川幸子、稻田　綱が行い、写真撮影、執筆・編集は瀬古が行った。

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 位置と歴史的環境	2
3. 調査の概要	5
(1) 土層の堆積状況と遺物の出土状況	5
(2) 杭 列	5
(3) 自然流路と遺物の出土状況	9
(4) 磁 群	10
(5) 出土遺物	11
①須恵器	11
②土師器・土師質土器	15
③貿易陶磁器	16
④国産陶磁器	19
⑤瓦	20
⑥その他の遺物	25
4. ま と め	26



第1図 島根県松江市山代町所在寺の前遺跡位置図

1. 調査に至る経緯

有限会社松雲土木では市内山代町寺前地内において昭和63年度に「(仮称) 山代郷団地造成工事」を計画し、昭和63年7月22日付でその予定地内の埋蔵文化財の分布調査依頼書が松江市教育委員会教育長宛に提出された。

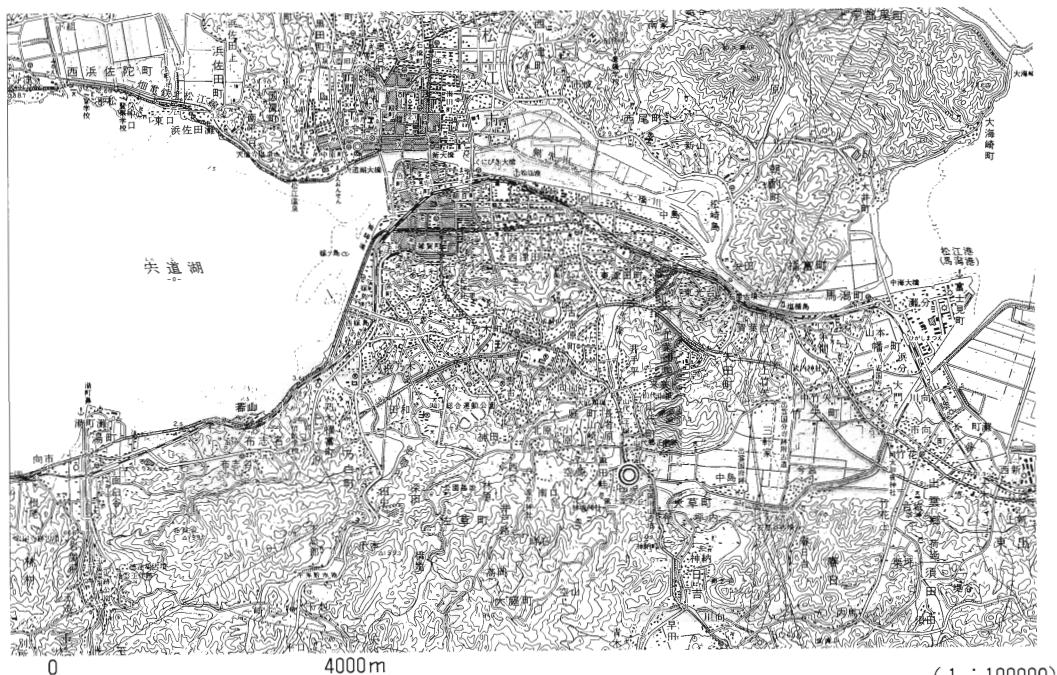
しかしこの予定地周辺には「四王寺(山代郷南新造院)跡」、「小無田遺跡」や「山陰道推定地」という周知の遺跡が所在していることから、有限会社松雲土木と協議した結果、試掘調査をおこなうことになり、昭和63年7月27日から29日の3日間で試掘場を9箇所設定しておこなった。

その結果、「四王寺(山代郷南新造院)跡」にもっとも近い調査区では土師器片・須恵器片・布目瓦等の遺物が多く出土すると共に耕作土の下の非常に硬い地盤の南端には加工面が確認できた。しかし他の調査区では遺物は出土したがその量は非常に少なく遺構も確認できなかった。これらのことから四王寺跡に近接した調査区付近には四王寺(山代郷南新造院)跡関連の建物跡や溝跡等の遺構が想定されたが、山陰道推定地については確認できなかった。

そして、昭和63年8月25日付、松教社第412号で有限会社松雲土木に試掘調査の結果を回答すると共に「①この開発予定地の北東部については、本格的な発掘調査(全面調査)が必要であるが、その実施年度は数年先になること。②それ以外の区域については開発工事を着工されても差し支えないこと。③この試掘調査で確認された遺跡を寺の前遺跡と命名すること。」を通知し、また、事業者宛に回答したことを島根県教育委員会教育長宛に報告した。

有限会社松雲建設興業から平成4年12月25日付で「寺の前遺跡」発掘調査依頼書が松江市教育委員会教育長宛に提出されたが、平成5年1月20日付、教文第684号で平成6年度以降に対応することを事業者宛回答した。

その後、発掘調査計画を調整した結果、平成6年度において調査を実施することになったものである。



第2図 寺の前遺跡位置図

2. 遺跡の位置と歴史的環境

寺の前遺跡（1）は島根県松江市山代町字寺の前248—8番地外にあり、山代郷南新造院（四王寺）跡（2）のある山代町字師（四）王寺の南西隣接地である。このあたりは『出雲国風土記』に「神奈備野」と称されている茶臼山（171.5m）の南麓に舌状に張り出した標高20mほどの台地になっており、本遺跡はその西南の裾に位置している。またこの地域では有数の穀倉地帯である意宇平野の西北隅にあたり、原始、古代から人々の活発な活動の場となつて来た。

旧石器時代の遺物では下黒田遺跡（3）から玉髓製の剝片や石核が出土し、四王寺跡西方の市場遺跡（4）では黒曜石製の細石刃石核になる可能性のあるものが発見されている。

縄文時代の遺跡はあまり解明されているとは言えないが、茶臼山の西北を大橋川にそそぐ馬橋川中流域に石台遺跡（5）があり縄文後・晩期の土器が多く出土している。

弥生時代の遺跡は意宇平野の中央部に布田遺跡（6）、夫敷遺跡、上小紋遺跡（7）、向小紋遺跡（8）などの遺跡が存在し、溝状遺構や水田跡が調査されている。

古墳時代中・後期には県内有数の古墳群が造られる。茶臼山西北の馬橋川水系には大庭鶏塚古墳（9）、山代二子塚古墳（10）、山代方墳（11）、永久宅裏古墳（12）、狐谷横穴群（13）、十王免横穴群（14）、東淵寺古墳（15）があり、西岸の向山には未盗掘の可能性のある石棺式石室をもつ向山1号墳（16）も発見された。南方の丘陵には「額田部臣」の銘文入円頭大刀が出土した岡田山1号墳（17）をはじめとして岡田山2号墳、団原古墳（18）、岩屋後古墳（19）、御崎山古墳（20）などが分布している。意宇平野の南側丘陵上には古天神古墳（21）、東百塚（22）・西百塚古墳（23）、安部谷横穴群（24）などが営まれている。

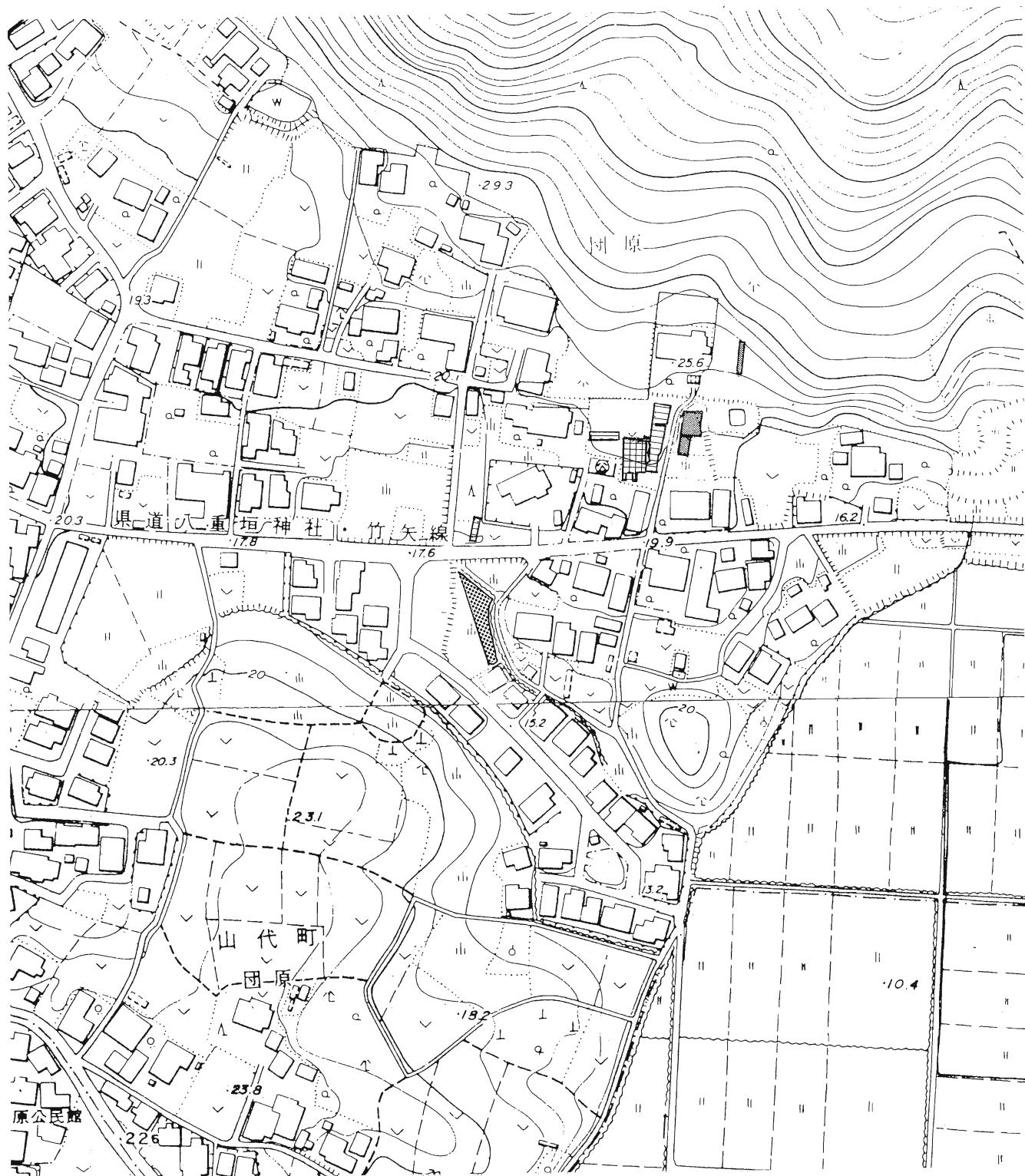
歴史時代に入ると意宇平野とその縁辺には出雲国庁（25）、意宇郡家、意宇軍団、駅、山代郷正倉（26）などが設置され、新造院も2ヶ所あったことが『出雲国風土記』にみえる。平野北縁には国分寺（28）、国分尼寺（29）も造立されて、この一帯は古代出雲の政治と文化の中心地として栄えたことがうかがわれる。

中世の遺跡は意宇平野の北縁部に中竹矢遺跡（31）、南縁部に大屋敷遺跡（32）、才垣台遺跡（33）、天満谷遺跡（34）、西の低丘陵上には出雲国造館跡（35）があり、12～14世紀代の貿易陶磁器や土師質土器が発見されている。茶臼山の西南麓を中心とした地域では14～16世紀頃の遺跡が主に存在し、黒田館跡（36）、小無田遺跡（37）、古代寺院として知られているが中世の遺物も出土している四王寺跡（2）、15・16世紀代の遺物と同時期の可能性のある建物跡が見つかった市場遺跡（4）などが分布している。茶臼山（38）は在地有力者の中世山城として少なくとも15・16世紀代には機能・存続していたらしいということがわかっている。



- | | | | |
|-------------|------------|-------------|------------|
| 1. 寺の前遺跡 | 12. 永久宅裏古墳 | 23. 西百塚古墳群 | 34. 天満谷遺跡 |
| 2. 山代郷南新造院跡 | 13. 狐谷横穴群 | 24. 安部谷横穴群 | 35. 出雲国造館跡 |
| 3. 下黒田遺跡 | 14. 十王免横穴群 | 25. 出雲国庁跡 | 36. 黒田館跡 |
| 4. 市場遺跡 | 15. 東淵寺古墳 | 26. 山代郷正倉跡 | 37. 小無田遺跡 |
| 5. 石台遺跡 | 16. 向山1号墳 | 27. 来美廐寺 | 38. 茶臼山城跡 |
| 6. 布田遺跡 | 17. 岡田山1号墳 | 28. 出雲国分寺跡 | |
| 7. 上小絞遺跡 | 18. 団原古墳 | 29. 出雲国分尼寺跡 | |
| 8. 向小絞遺跡 | 19. 岩屋後古墳 | 30. 国分寺瓦窯跡 | |
| 9. 大庭鶴塚古墳 | 20. 御崎山古墳 | 31. 中竹矢遺跡 | |
| 10. 山代二子塚古墳 | 21. 古天神古墳 | 32. 大屋敷遺跡 | |
| 11. 山代方墳 | 22. 東百塚古墳群 | 33. 才垣台遺跡 | |

第3図 周辺の主要遺跡



- 昭和59年度 山代郷南新造院（四王寺）跡 島根県調査地
- 昭和62年度 "
- 平成5年度 "
- 平成6年度 寺の前遺跡 松江市調査地

第4図 調査地 位置図 (1 : 2500)

3. 調査の概要

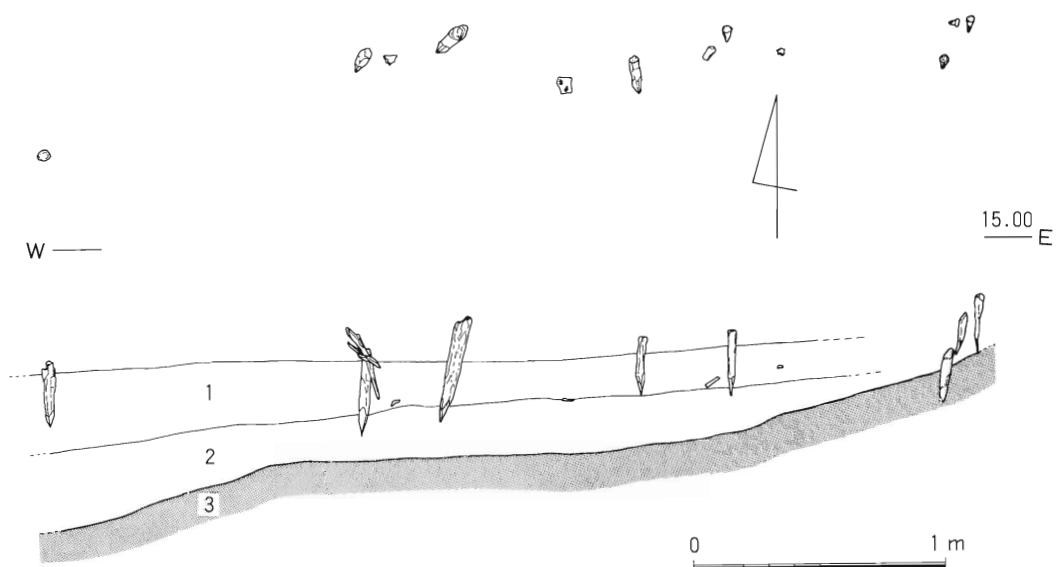
調査の結果、検出された遺構としては近世以降の杭列があるのみであった。地山は乃木礫層の露出した部分とそのうえに乗った粘土層の部分からなり、それらを穿つて出来た自然流路4本が検出された。試掘調査で「非常に硬い地盤の南端に加工面が確認された。」とあるのはこの自然流路3の落ち込みの肩にあたる。遺物は耕作土以下地山までの包含層中及び自然流路1、2から布目瓦を中心として、古墳時代後期から中世までの須恵器、土師器、土師質土器、12世紀ごろの貿易陶磁器、近世瓦、近世の国産陶磁器などが出土している。

(1) 土層の堆積状況と遺物の出土状況（第7図）

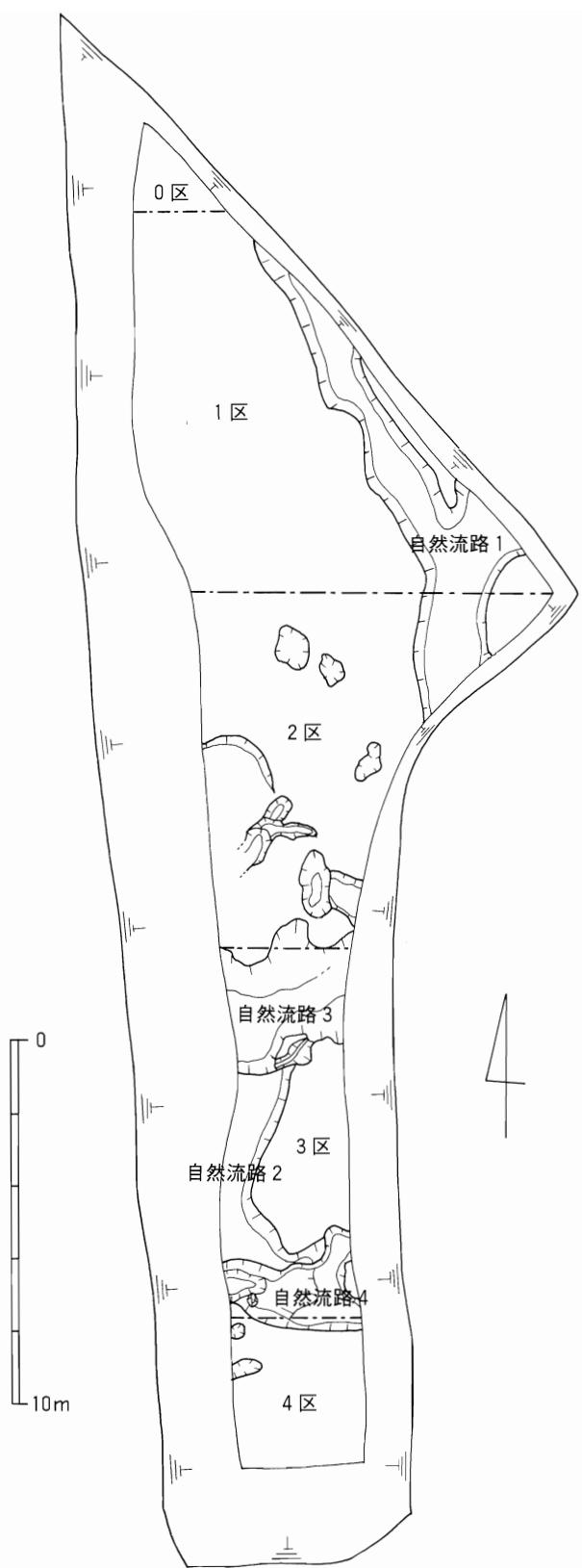
水田の耕作土から地山面までの深さは30~70cmある。耕作土は20~30cmあり、若干の須恵器と陶磁器、瓦片などが含まれていた。耕作土の下の茶褐色土は厚みが10~40cmあり、布目瓦、近世瓦、須恵器、中~近世の陶磁器などが出土した。茶褐色土の下は流路部分を除いて地山であり、この界面に布目瓦や須恵器、土師器、陶磁器などが数多く検出された。地山面の標高は四王寺跡に最も近接した調査区北端部で15.6m、調査区南端で14.5mあり比高差は1.1mである。昭和62年度に県教育委員会が行った第Ⅲ調査区の南端の地山面は標高16.7mであるので、本遺跡の北端との比高差は1.1mであり、南西向きの緩斜面となっている。

(2) 杭列（第5図）

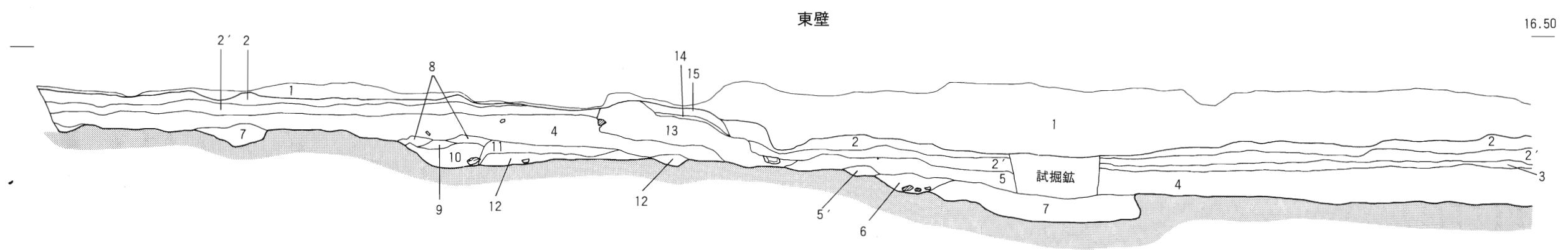
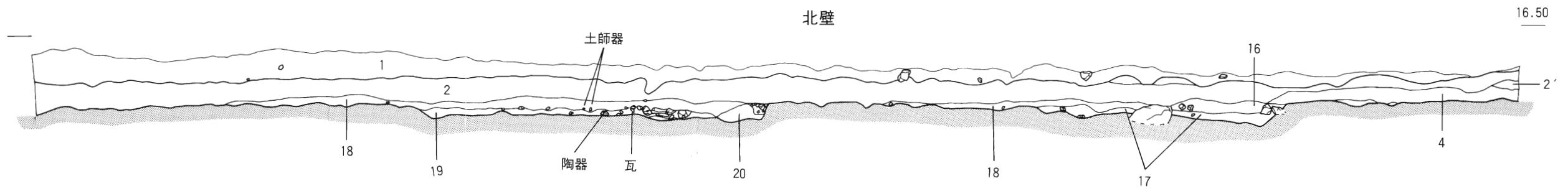
調査区南部で茶褐色土掘り下げ中に見つかったもので、ほぼ東西に8本、約1m南に離れて1本が残っていた。杭は直径3.5~6.0cm、残存長20~40cmを測り、上部は腐食していたが、下部の先端には



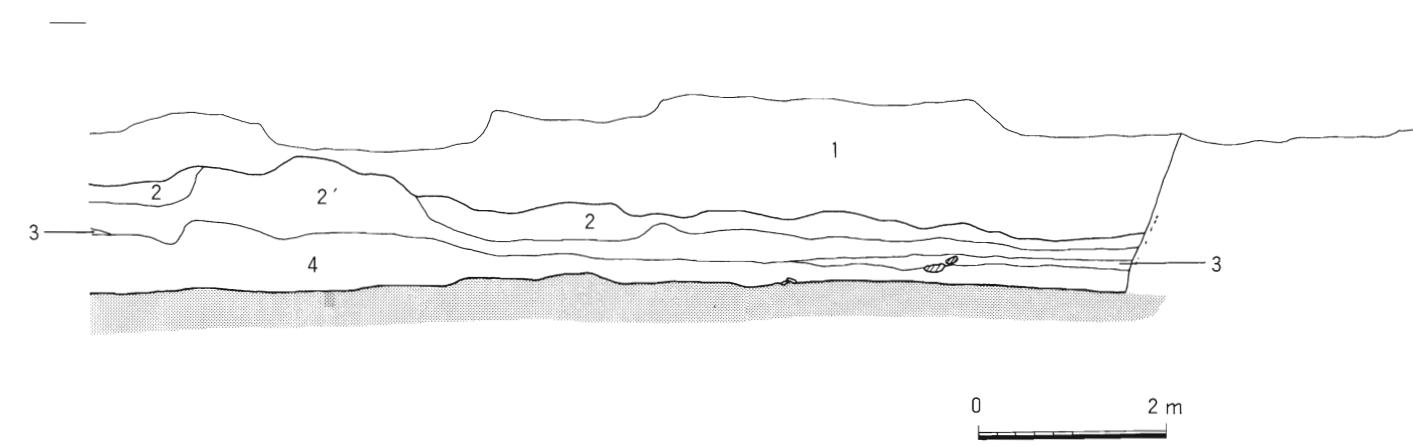
第5図 杭列実測図



第6図 調査後全体図



- 1. 盛 土
- 2. 暗灰褐色土（耕作土）
- 2'. 暗灰褐色土（2よりやや締りあり）
- 3. 暗茶褐色土に小～中礫を含む
- 4. 茶褐色土
- 5. 茶褐色土に小～中礫を多く含む
- 5'. 5と同色で小礫のみ
- 6. 暗茶褐色砂質土（軟らかい）
- 7. 暗茶褐～黒褐色土（非常に締りあり）
- 8. 暗茶褐色土
- 9. 暗灰褐色土
- 10. 暗灰褐色砂質土（小礫多く含む）
- 11. 暗茶灰褐色粘質土
- 12. 暗灰褐色砂質土に小～中礫を含む
- 13. 暗茶色中礫層 瓦を含む（近世以降）
- 14. 淡黄褐色小礫層
- 15. 砂利
- 16. 茶褐色～黃褐色混合土（粘性あり）
- 17. 暗灰色砂質土（粘性あり）（小～中礫含む）
- 18. 暗灰色粘質土
- 19. 暗灰色粘質土（粘性あり）
- 20. 暗灰色粘質土（中礫含む）



第7図 土層断面図

削り痕がはっきりと見られる。杭列と直交する東壁の土層断面を観察すると杭の打ち込まれた茶褐色土は杭列の少し北から段がついて落ちているので土崩れを防ぐための土留めに打たれたものであろうと考えられる。その時期は茶褐色土の下から近世の陶磁器を含む自然流路1が検出されていることから、近世または近世以降に作られたものである。明治22年に作られた地籍図には字名は「寺の前」で「田」と記されている。

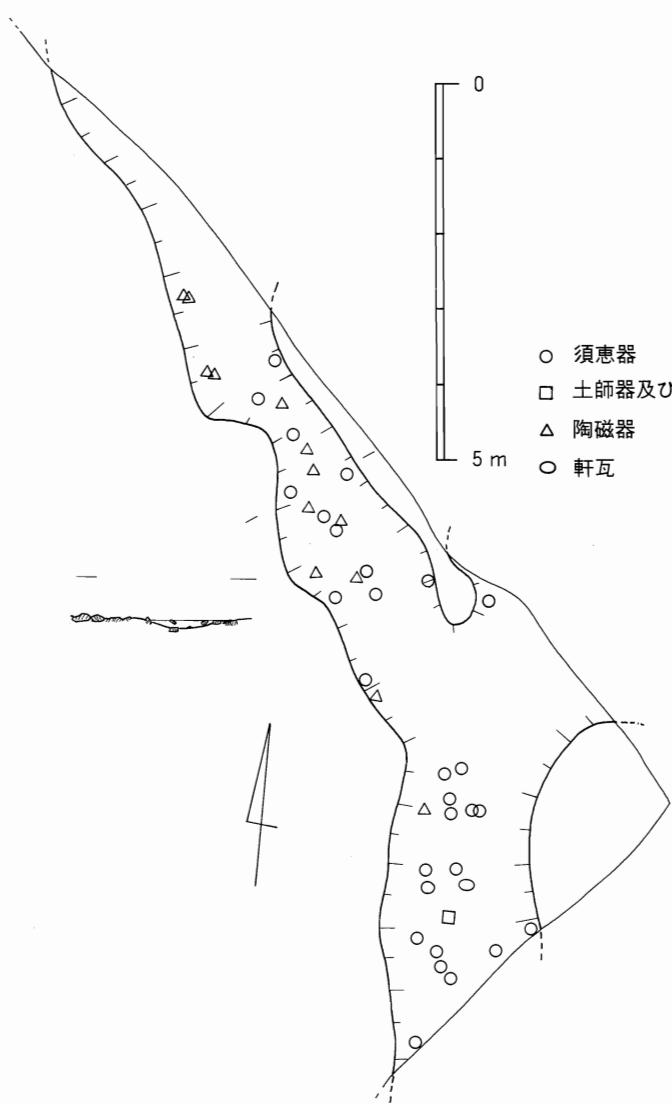
(3) 自然流路（第8図～第10図）

礫層と粘土層の地山面から4本検出された。堆積土を見ると常に流れがあったわけではなく、一度削り込まれた場所に澱んで堆積したものと言ったほうがよいかもしれない。

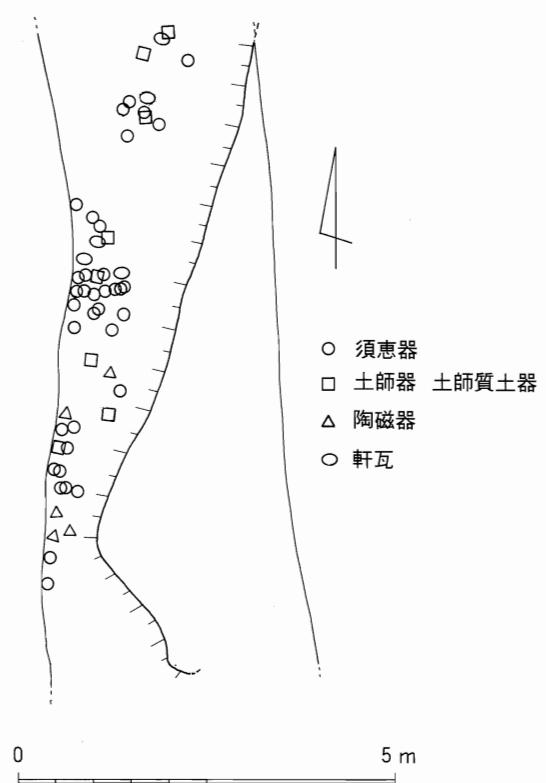
流路1は調査区北端の西よりから東南方向にわずかに傾斜している。幅は1～2m、深さは10～30cmである。埋土は上層が暗灰色粘質土、下層が暗灰色砂質土でいずれも中～大礫を含み、布目瓦、須恵器、土師器、近世の陶磁器類が出土した。

流路2は調査区中央部を北東から南西に傾斜している。幅は2m以上あり、深さは50cm前後ある。埋土は大部分が中礫を含む暗茶褐色土であったが、底面上には砂が薄くたまつた箇所も見られた。遺物は布目瓦、古墳時代から奈良時代の須恵器、土師質土器、12世紀代の貿易陶磁器が出土した。

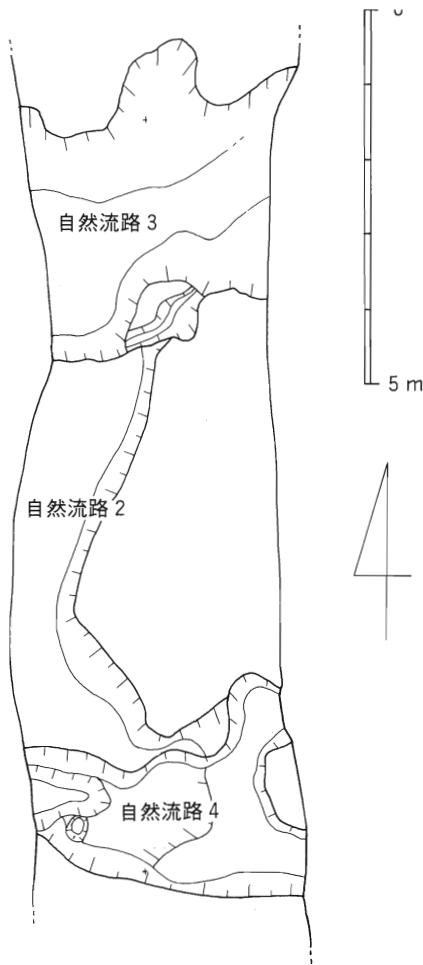
流路3は2の北半の下に存在し、東から西に傾斜している。幅は約3m、深さは50cm前後ある。締まりのある黒褐色土が堆積しており、底面には20～30cm大の



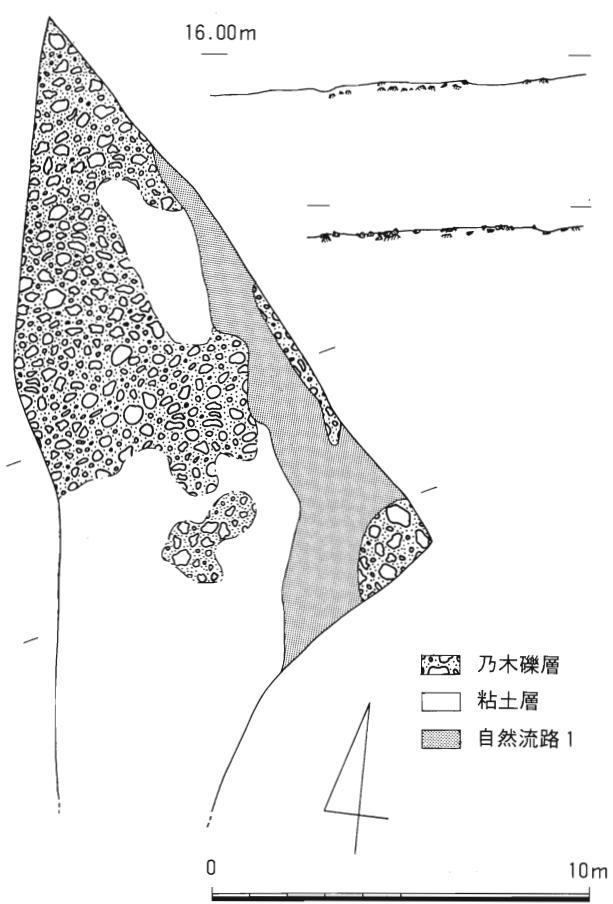
第8図 自然流路1 遺物出土分布図



第9図 自然流路2 遺物出土分布図



第10図 自然流路2～4実測図



第11図 乃木礫層露出範囲

礫が数個見られた。遺物は全く出土していない。

流路4は2の南端の下にあり、東から西に傾斜している。幅は1～3m、深さは東端で15cm、西端で60cmある。非常に硬い茶～やや暗い茶褐色土が堆積しており、遺物は皆無であった。

(4) 地山の礫群と粘土層（第11図）

調査区内北西部の地山面には大量の礫（20～30cm大）が分布していた。当初は遺跡北部の茶臼山からの土石流によるものであろうと考えていたが、茶臼山の石は玄武岩であるがここで出ているのは玄武岩以外の石ではないかとの指摘があり、地質関係者の助言を受けたところ次のようなことがわかった。この礫層は12～13万年前にできた乃木層に相当するもので、河川で流れ込んで来て堆積したものである。当時の河川は、早い時期には現在の八雲村方面から南高校と工業高校の敷地を通って乃木駅に向かって流れていたが、途中流路を変えて中海側へそそぐようになったらしい。礫群は花崗岩、流紋岩、アPLIT等により構成されている。角が削られて円礫となっており、いずれも岩坂や熊野あたりから流れ込んで来たものである。また本遺跡の乃木層は南西に傾き加減にもぐっており、遺跡南半の粘土は乃木層の上に乗った粘土層である。
（註）

（註） 三浦 清氏（島根大学名誉教授）のご教示による。

(5) 出土遺物

①須恵器

出土状況については大部分は第4層の茶褐色土中とその下の地山との界面から出ている。耕作土中と流路1・2中からは数点の出土にとどまった。総数は約70点である。

壺蓋（第12図-1～3）1は天井部と口縁部の境に沈線2条をもち、天井部はヘラケズリする。2は口縁端部が垂下するタイプのもの、3は低い輪状つまみをもつものである。1は山陰須恵器編年Ⅲ期、2・3は出雲国庁第2～3形式にあたる。

壺身（4～6）3点ともたちあがりが比較的高く内傾し、底部を回転ヘラケズリする。これらは山陰の須恵器編年Ⅲ期（6世紀後半）に相当する。

高台付壺（8～10）底部を糸で切り離した後回転ナデをするもの（9）と未調整のもの（8、10）がある。前者は国庁編年第3形式、後者は第4形式にあたる。

壺（11～17）11は口縁端部がわずかにくびれ、内面が肥厚する山陰地方でよく見られる壺である。

底部片（12～17）はすべて回転糸切未調整であり、国庁第4～5形式（8世紀後半～9世紀初頭頃）に相当すると思われるが、16は小さな底部から口縁に向かって大きく開く形態になるので12～15よりも後出すると考えられる。17は皿の可能性もある。

皿（18）口縁部が外反し、底部に糸切を行うもので、島根県教育委員会の行った四王寺の数度の調査でも多く出土しており、灯明皿と考えられている。

高台付碗（19）内底面に黒漆様のものが付着している。

腺（20、21）20は胴部に沈線と斜行刺突文が施されており古墳時代のものと考えられる。21は底部を糸切し、胴部下半をヘラケズリするもので、漆入れに転用されている。

高壺（22～24）22は体部に沈線2条をもつもの、23は脚筒部の破片で三方に透かしがあるもので、いずれも古墳時代後期のものである。24は壺部の口縁と考えられ、奈良～平安時代に見られる。

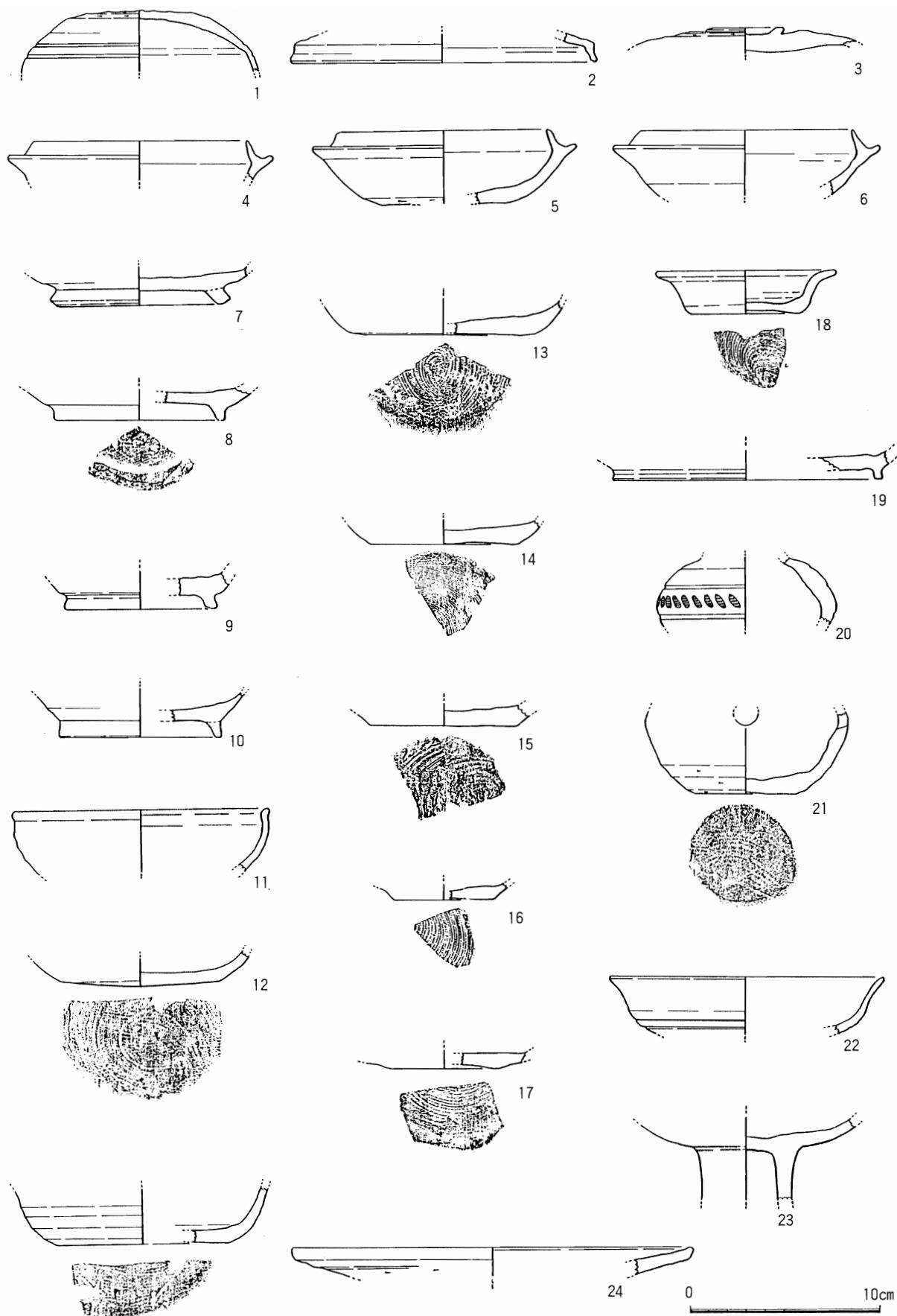
壺類（第13図-25～36）25は直口壺の頸部、26は長頸壺の肩の屈曲部である。27～30は頸基部や肩部胴部に断面三角形や台形状の突帯を貼り付けた壺又は瓶である。太宰府のSE-400や奈良県薬師寺西僧坊跡の調査で類似品が出ており、9世紀前半～10世紀後半頃の年代幅がある。31は長頸壺等の底部、32～35の平底は突帯貼付けの壺等の底になるのではないかと考えられる。33は糸切であり、32～35はナデ仕上げである。

鉢（36）口縁部は外反し、外面にハケ目状の痕跡、内面に指頭圧痕が見られる。

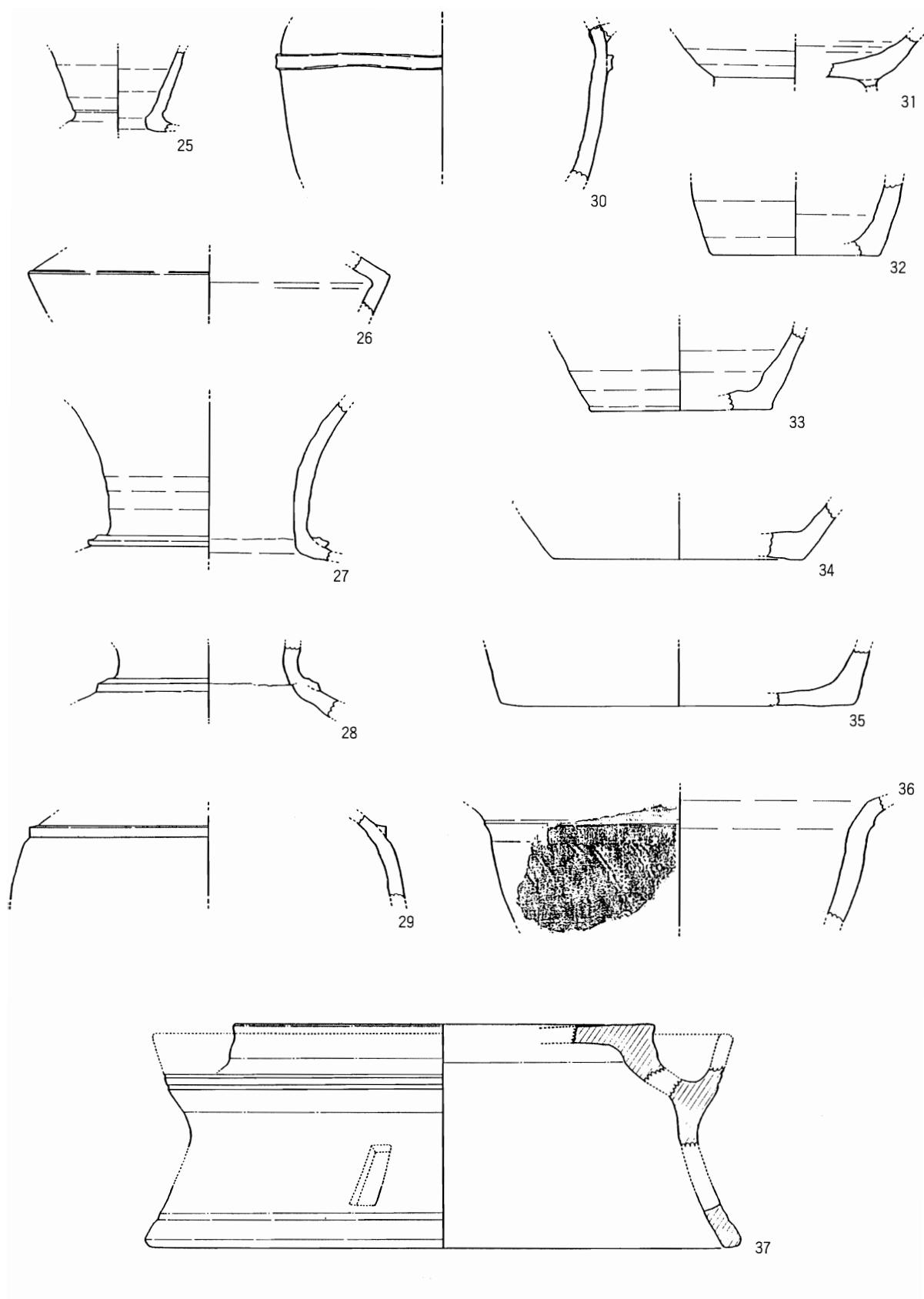
陶硯（37）円面硯である。磨墨面は直径23.6cmを測り、使用痕は顯著である。墨だめの部分は深さがあり、脚部には透かしをもつ。

甕類（第14図38～47）38～41は外面には平行叩き痕、内面には同心円押当具痕があるが、42の押当具痕は同心円の中に放射状に刻み目のはいるものである。43、44の口縁部片には退化した簡略な波状文が施される。45の甕の口縁端部は屈曲した特異な形態をしている。46・47は中世の亀山焼系の甕片である。46は外面がや粗い格子叩き、内面はナデとカキ目が施され、47は格子叩きが46よりも小さく、内面はナデのみである。

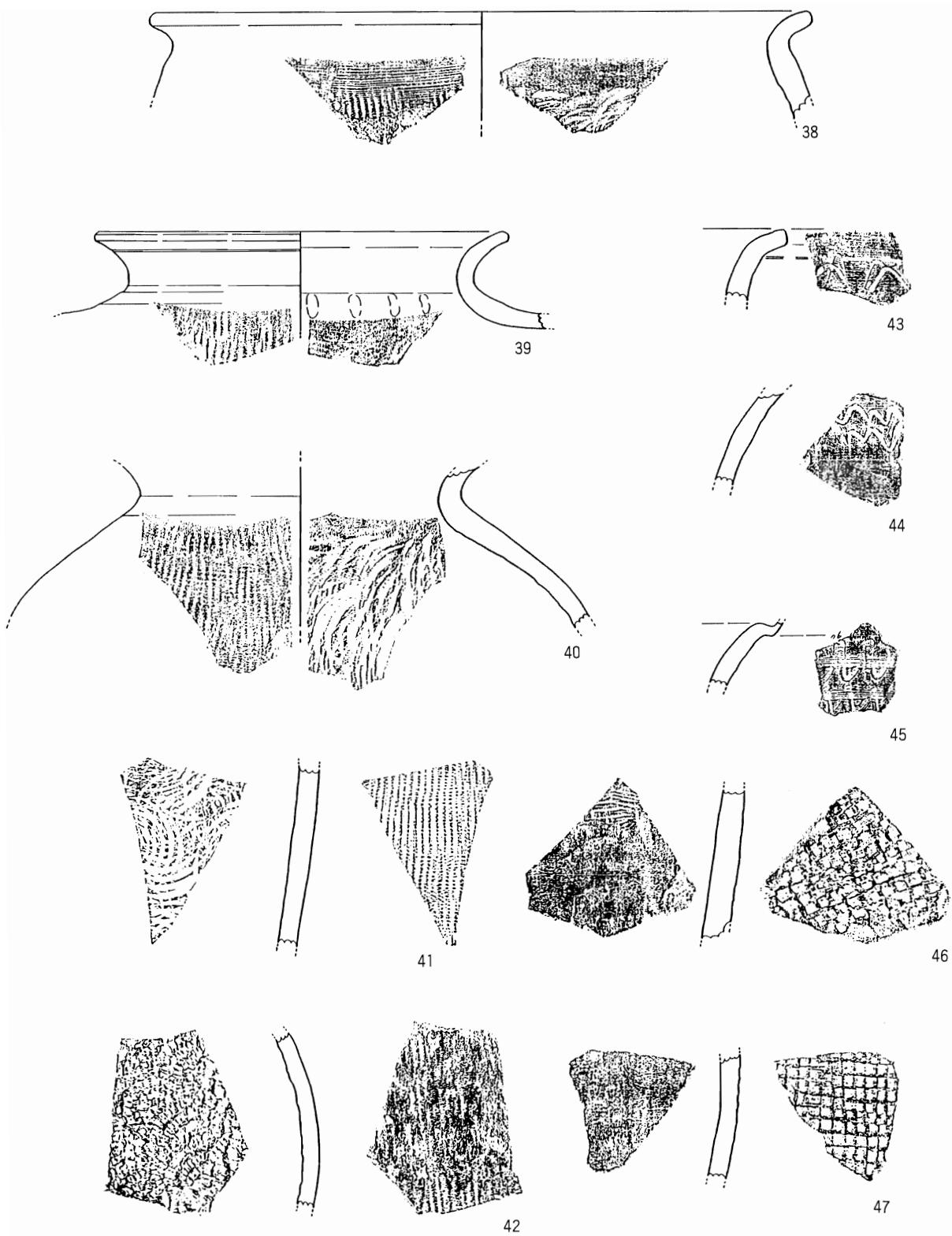
須恵器は以上のように古墳時代後期のものから中世亀山系のものまで存在するが、器種が豊富で量



第12図 須恵器実測図(1)



第13図 須恵器実測図(2)



第14図 須恵器実測図(3)

的にも多いのは奈良～平安時代のものといえよう。

参考文献

山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』1960年

松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』 1970年

横田賢次郎「太宰府出土の土師器に関する覚書（3）」『研究論集5』1975年九州歴史資料館

奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987年

②土師器・土師質土器・瓦質土器（第15図）

土師器・土師質土器は大部分が第4層茶褐色土と地山の界面から出ており、総数は17点あったが、全般的に摩滅が激しく、図化できたものは8点である。

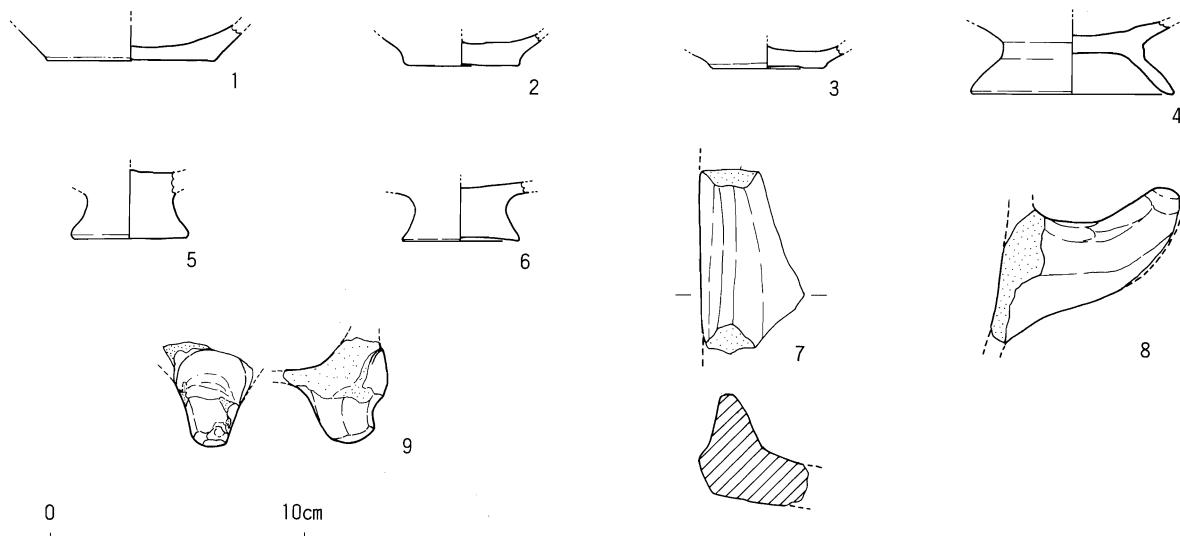
土師質土器坏（1～4）1～3は回転糸切痕をもつ底部片である。底部径は小さく、口縁にむかって大きく開く形態のものと思われる。4は「ハ」の字状に開く高台が付く。大坪3号墳の調査で出ており10世紀頃のものかと思われる。

台付皿（5、6）5は摩滅していて調整不明、6の底部には回転糸切痕が残る。石台遺跡、中竹矢遺跡等に類例がある。12～13世紀頃盛んに使われていたようである。

竈（7）焚き口の側部にあたる小破片である。

把手（8）餌か甕の胴部につけられていたものであろう。

瓦質の獣形脚部（9）自然流路1から出土した瓦質の焼きのもので壺等の脚のひとつと考えられる。灰色～黒色を呈しており、一部ヘラミガキされている。



第15図 土師器・土師質土器実測図

参考文献

島根県教育委員会「大坪古墳群」『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘報告書』1976年

島根県教育委員会『石台遺跡－馬橋川改修に伴う発掘調査報告－』1986年

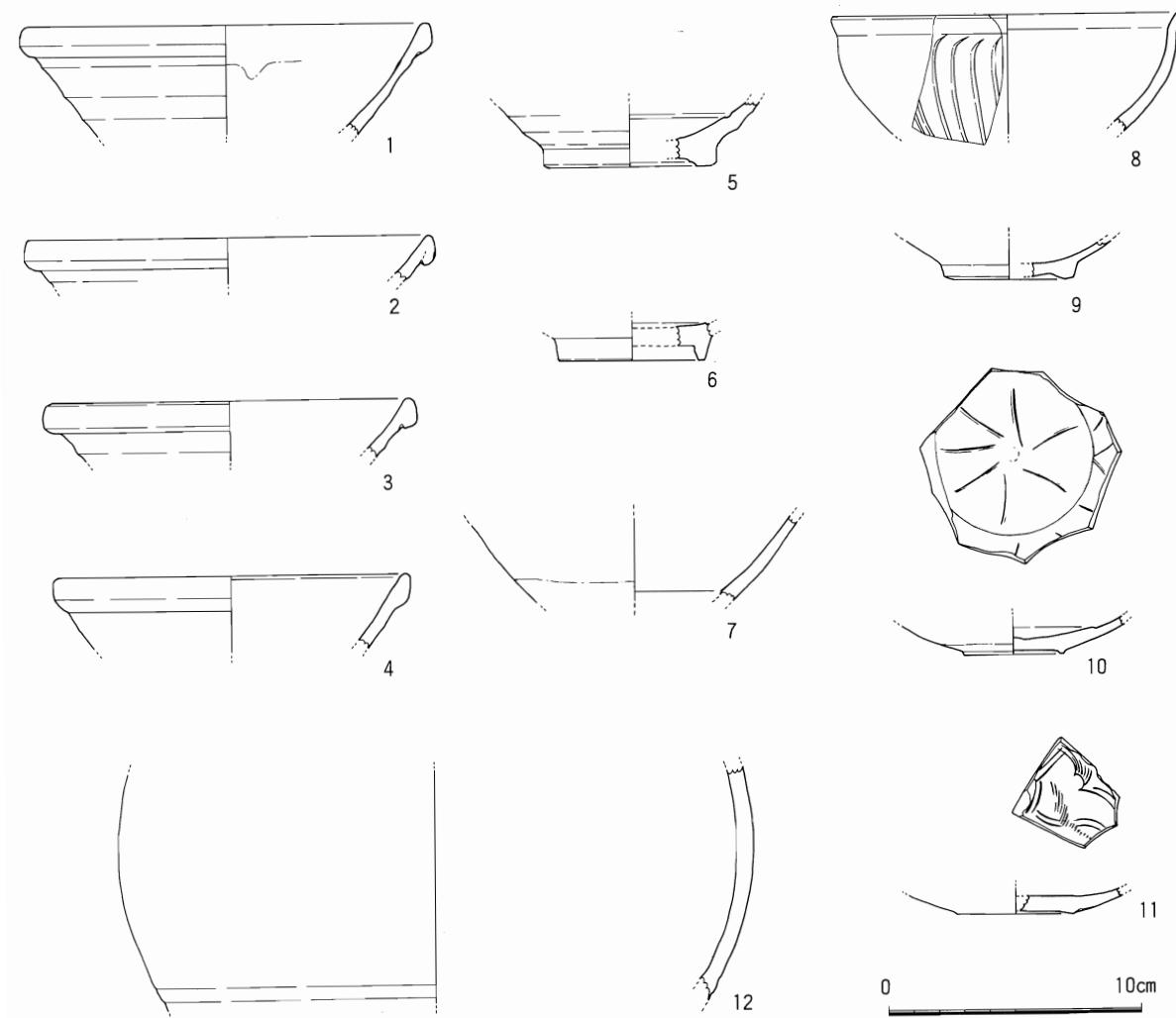
島根県教育委員会『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X（中竹矢遺跡）』1992年

広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号 1992年

③貿易陶磁器（第16図）

第4層茶褐色土中、地山上、自然流路2から14点の貿易陶磁器が出土しており、白磁の碗・皿、陶器の壺片、青磁の盤がある。

白磁碗（1～8）1～4は口縁部を大きめの玉縁につくる太宰府編年の白磁碗N類のものである。胎土は灰白色～淡灰色を呈し、黒い細粒を含む。釉色は灰白色又は黄色みを帶びた淡灰色である。5



第16図 貿易陶磁器実測図

はⅣ類の底部になるもので、見込みに沈線状の段をもつ。底面の削り込みは浅い。6は白磁碗V類の底部である。細くて比較的高い高台をもち、見込みには体部側に落ちる段がある。胎土は黄白色で黒い細粒を含み、釉は黄白色を呈す。7は体部の小片であるが内面下半の釉を蛇の目状に搔き取っており白磁碗VII類と考えられる。8は外面に片切彫の菊花文が施され、口縁端部は外反する。胎土は灰白色で釉は薄くかかり、やや灰色を帶びている。中国廣東地方潮州窯系のものといわれ、白磁碗VI類に分類される。これらの白磁碗はいずれも12世紀代の中国産のものである。

白磁皿（9～11）9は白磁皿II類になるもので、碗IV類と同じく底部の削り込みは浅い。胎土に黒色微粒を含み、淡灰色を呈す。釉は灰色で、外面は無釉である。10は内面に花文をもち、体部側に落ちる段がある。高台は小さく削り出されている。胎土は灰白色を呈し、若干の黒い細粒を含む。釉色は黄味がかった灰白色で、全体に非常に細かい貫入が入っている。白磁皿VII-1・b類である。11は内面にクシとヘラによる文様があり、底部はやや上げ底になっている。胎土はやや灰色がかった白色で、黒い細粒を若干含む。釉色は青味がかった灰白色である。白磁皿VII-1類にあたる。これらの白磁皿もいずれも12世紀代の中国産のものである。

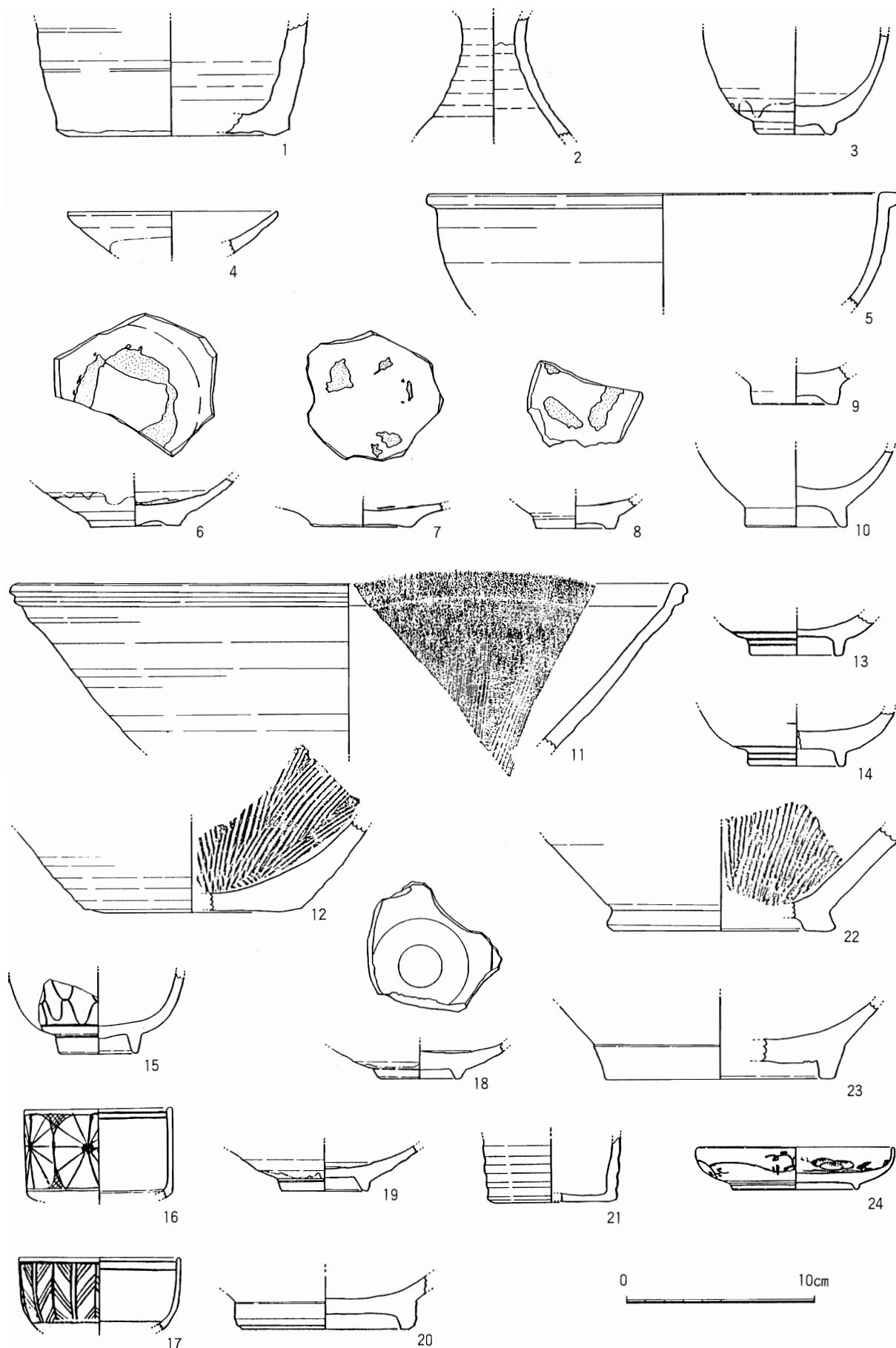
陶器壺類（12）壺等の胴部の破片である。内外面共黄褐色の釉がかかり、淡褐色の胎土中には黒色の粒子を含んでいる。12～13世紀の中国産である。

青磁盤（写真図版5）龍泉窯系の盤の体部片で内面に放射状の文様をもつ。胎土は粗く黒い粒子を含み、灰白色である。釉はやや厚めにかかり、釉色はくすんだ青緑色をしており、貫入が入る。14～16世紀のものである。

12世紀代の白磁碗・皿、陶器壺類は意宇平野縁辺の中竹矢遺跡、天満谷遺跡、馬橋川流域の石台遺跡等で多く出土しているが、今までの四王寺跡の調査では14～15世紀代のものが大半を占め、この時期のものは平成5年度島根県調査の白磁V類碗が1点あるのみである。今回の寺の前遺跡からの出土品は時期的にも量的にも注目されてよいと思われる。

参考文献

- 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器－形式分類と編年を中心として」『研究論集4』
1978年
- 山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究』NO.8 1988
年
- 島根県教育委員会『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X（中竹矢遺
跡）』1992年
- 島根県教育委員会「天満谷遺跡」『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財
発掘調査報告書』1987年
- 島根県教育委員会『石台遺跡－馬橋川改修にともなう発掘調査報告－』1986年
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VII－島根県松江市山代町所在・山代郷新造院
(四王寺)跡－』1994年



第17図 陶磁器実測図

④国産陶磁器（第17図）

国産陶磁器は備前系焼締陶器、唐津系陶器、陶胎染付、伊万里系磁器、青磁、地元産陶器などがあったが、初めの三者は第4層茶褐色土以下で大部分が出土し、後三者は上層の暗灰色土層等で出土している。

備前系焼締陶器（1、写真図版6の左側2段目）1は壺の底部である。胎土は細かく、器表には塗土の施された戦国末から近世初頭頃のものと思われる。写真図版6の個体は1よりやや下る時期の徳利の胴部である。

唐津系陶器（2～9、11、12）2～5は17世紀初頭頃の瓶、碗、皿、片口鉢である。6～8は砂目積の溝縁皿になるもので、17世紀前半から中頃の時期のものである。10は唐津系ではなく産地不明の碗であるが、^(註1) 17世紀中頃の溝縁皿等と一緒に出てくるといわれるもので、全面に淡黄色の釉を施し、畳付のみ釉を搔き取る。全体に細かい貫入が入っている。11、12は擂鉢である。内面には12条単位の条線が付いている。

陶胎染付碗（13、14）陶器の胎土に染付を施した碗である。長崎県木原窯等で焼かれ、17世紀末から18世紀に出てくる。図化したもの以外にも数点ある。

伊万里系磁器（15～19、24）15～17は染付碗である。18の染付皿は見込みが蛇の目状に釉剥ぎされている。^(註2) 18～19世紀のものか。19は白磁皿で見込みが蛇の目状に釉剥ぎされている。底部外面は無釉である。17世紀以降の国産品であるが時期は限定できない。24は高台内に「福」の字の銘款が施された皿である。内面には梅花文、外面には連続唐草文が描かれている。裏文様に連続唐草文を描いた皿は南川原窯ノ辻窯等で多く焼かれており、18世紀代のものと思われる。

青磁（20、21）20は緑褐色の釉が薄くかかった大碗又は鉢の底部で、糸きり後削り出して高台を作っている。底部外面にヘラ先様のもので付けた圧痕（？）が4カ所見られる。21は瓶である。底部には回転糸切痕があり、白色の胎土に淡い青緑色の釉が施されている。20、21は産地、時期共に不明である。

地元産陶器（22、23）布志名焼系統のものと考えられる擂鉢である。他にも数点あり、鉢などもある。

註1～3 村上 勇氏（広島県立美術館）のご教示による。

参考文献

間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社

九州陶磁文化館『国内出土の肥前磁器』1984年

大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社

⑤瓦

瓦類は出土遺物の大半を占め、コンテナ10数箱を数えた。瓦の種類は古代の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、近世以降の瓦等があったが完形に復元できるものは皆無で、手のひら大かそれ以下の小片となっていた。布目瓦は第4層茶褐色土と地山との介面から圧倒的に多く出土し、自然流路1及び2と茶褐色土中にも含まれていた。近世以降の瓦は上層の暗褐色土中から出土している。

軒丸瓦（第18図1～4）軒丸瓦は4点ある。1は内区と外区を細い圈線で画し、外区内縁には約1.2cm間隔に珠文を置く。外縁は摩滅欠損していて形状不明である。面違い鋸歯文をもつ三角縁であれば四王寺I類軒丸瓦になるが、平成5年度の県の調査で出土しているような素文で直立縁のものと同類の可能性もある。焼成は軟質で淡い橙灰色を呈す。2～4は幅広の蓮弁を十字形に配し、その間を同様な形の間弁で埋めるもので、中房には1+4の蓮子が置かれていると思われる。外縁は素文の直立縁となっている。四王寺II類軒丸瓦である。写真図版9の右下は軒丸瓦の丸瓦部接合部分のもので内外に接合しやすくするための刻み目が付けられている。

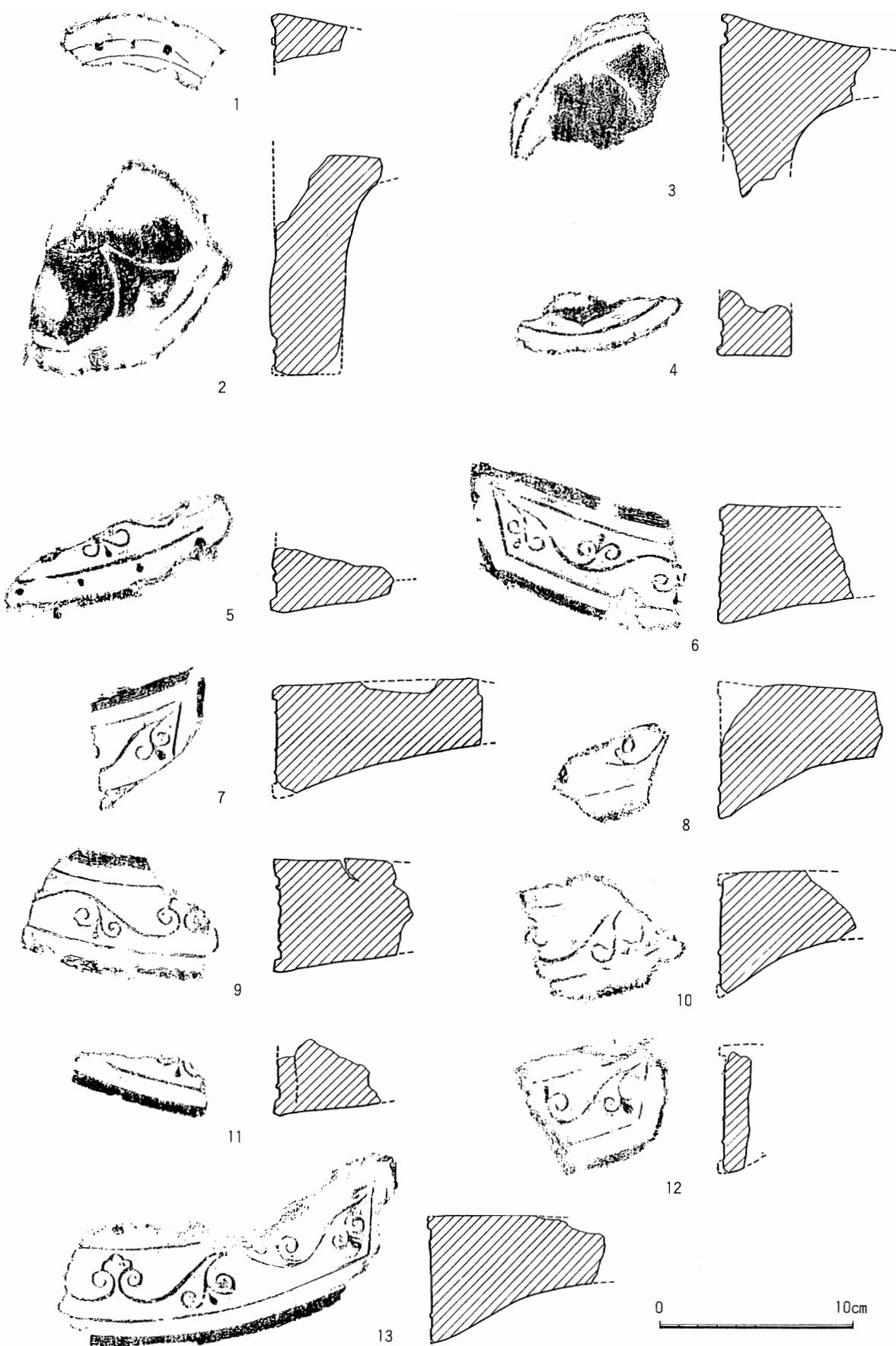
軒平瓦（第18図5～13）軒平瓦は9点ある。5は外区と内区を突線で画し、外区には約2.6cm間隔に珠文を置き、内区には唐草文を付ける。頸は段頸となっている。四王寺I類軒平瓦である。6～13は外区と内区を突線で画し、外区は素文で、内区は左右両脇から唐草文を3回反転させ、中心に山形の飾りを置くものである。頸は曲線頸となっている。いずれも四王寺II類軒平瓦である。

丸瓦（第19図14～16）丸瓦は平瓦に比べると出土量が非常に少なく、コンテナ1箱に満たない。14は行基式とわかる唯一のもので、凹面は布目痕が残り、凸面は縄目の叩きの上からナデしている。15は凹面に布目痕が残り、凸面は幅2～3cmのヘラケズリが施されている。16は凹面に布目痕が残り、凸面は縄目の叩きの上にナデが施されている。

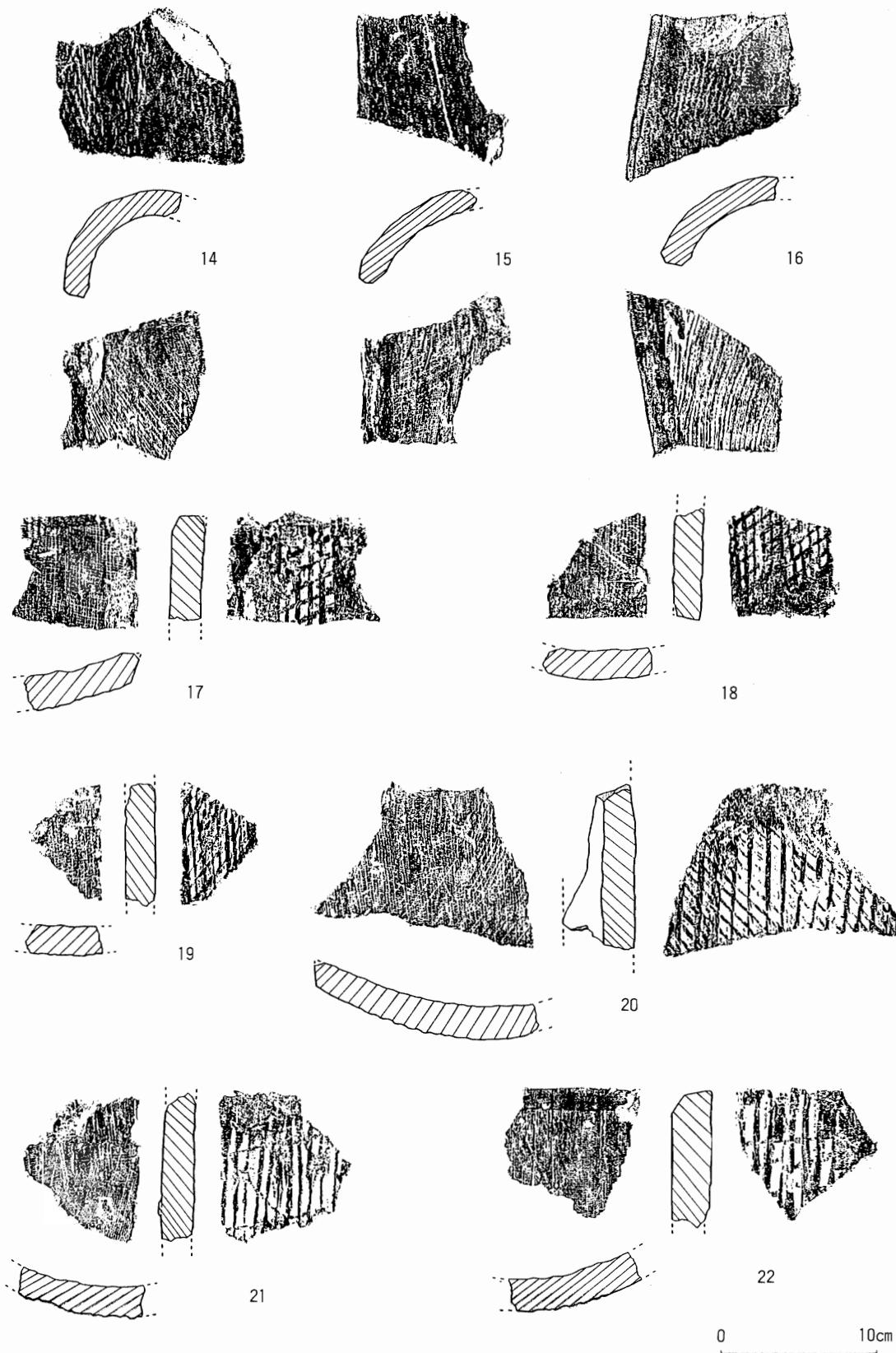
平瓦（第19図17～22、第20図23～27）平瓦はコンテナ約10箱分出土した。ほとんどが縄目の叩きのもので、格子叩きや平行叩きはごく一部のものに見られたに過ぎない。17～20は凹面に布目痕が残り、凸面に斜格子叩きを行うものである。21は平行線に斜線の入る叩き痕があり、離れ砂が見られる。22も同様の叩きを行うものである。23～27は縄目の叩きをもつものである。24、25、27には離れ砂が見られる。また23、25、27の凹面には布目の上から幅3cm前後の間隔をもつナデ痕（？）がある。

熨斗瓦（第21図28～31）厚さ1.6～2.2cmを測る。いずれも軟質の焼成で表面が摩滅しているが、片面には糸切り痕が残り、もう片面には縄目叩きが施されている。30は糸切り痕の上にごく一部であるが布目痕が残っている。

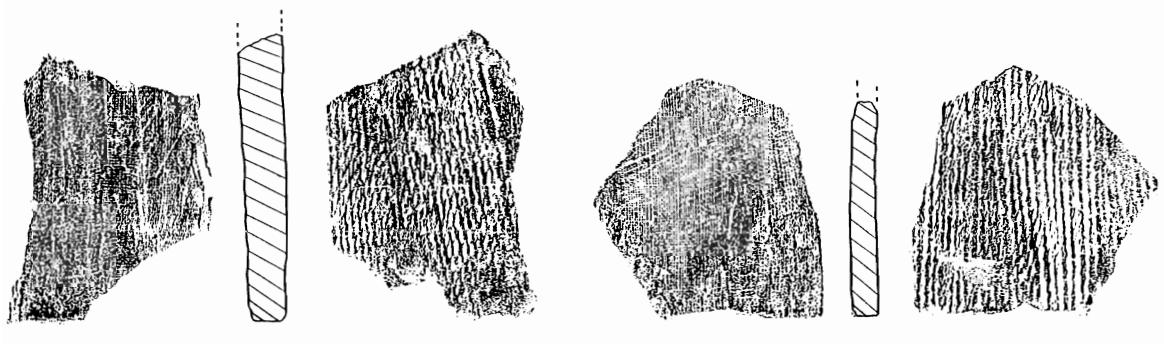
鷦尾（第22図）右側面の縦帯を中心とする縦7.5cm、横9.0cmの破片と考えた。須恵質の硬い焼成で灰色をしている。縦帯の幅は約4cmあり、高さは1.4cmまで残っている。鰭部にはナデが施されている。胴部はごく一部が残っているだけであり、外面にはナデ、内面には青海波文の叩き痕が見られる。胴部の厚みは3.4cmを測る。鷦尾は白鳳時代から平安時代にかけて瓦製、金銅製、鉛製、木製、石製等が盛んに作られたようであるが、出土例は全国的にも少なく、島根県内の発表資料としては今回が3例目である。（他に江津市久本奥遺跡で出土例があり、今年度報告書の発刊予定と聞く。）来美廃寺の鷦尾^{（註）}は胴部にうろこ状の紋様を沈線であらわし、内面には青海波文の叩き痕が見られる。本遺跡出土品は胴部の残りが悪く紋様の有無は不明であるが、来美廃寺の例と同様のものの可能性があり、時



第18図 瓦実測図(1) (軒瓦)

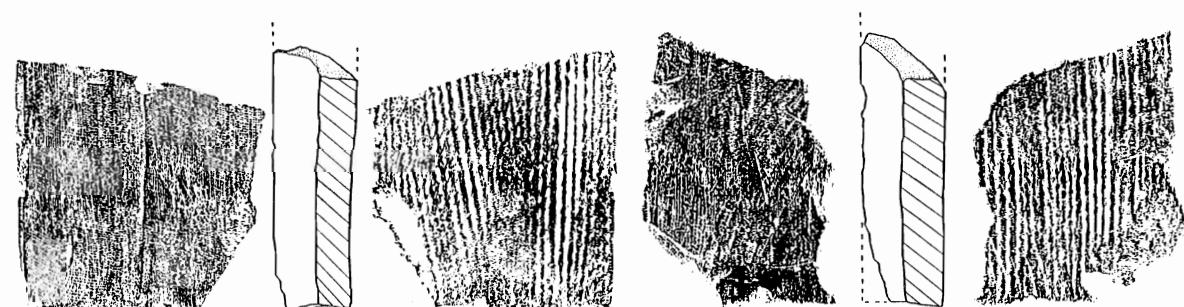


第19図 瓦実測図(2) (丸瓦・平瓦)



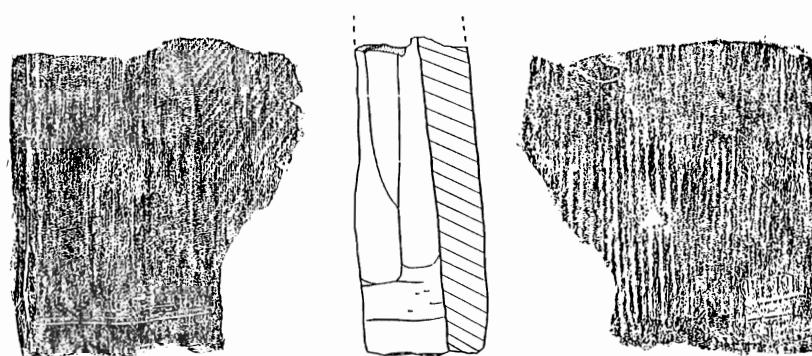
23

24



25

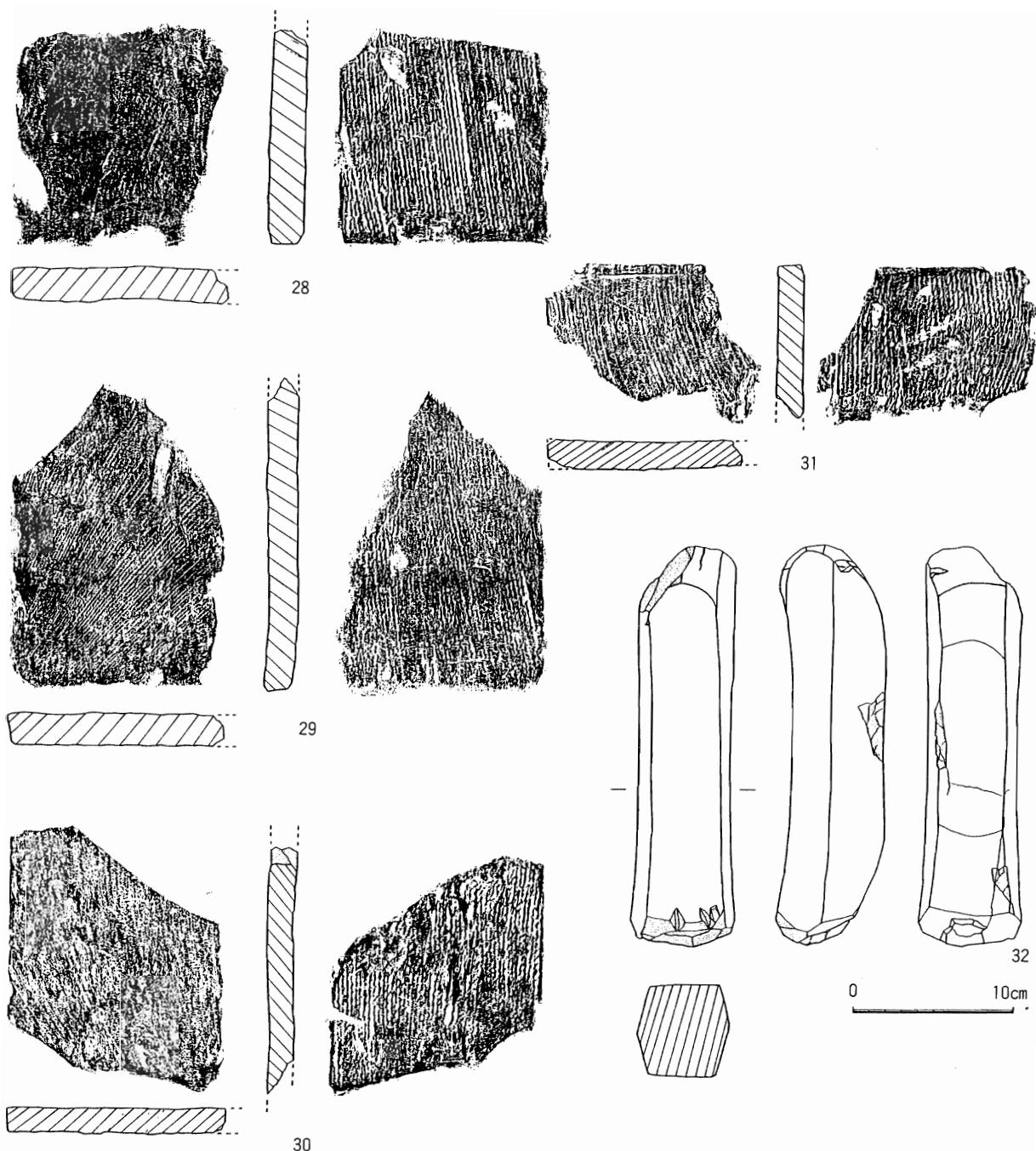
26



27

0 10cm

第20図 瓦実測図(3) (平瓦)



第21図 瓦実測図(4)・砥石実測図

期的には7世紀末～8世紀初頭頃かと考えられる。

⑥その他の遺物

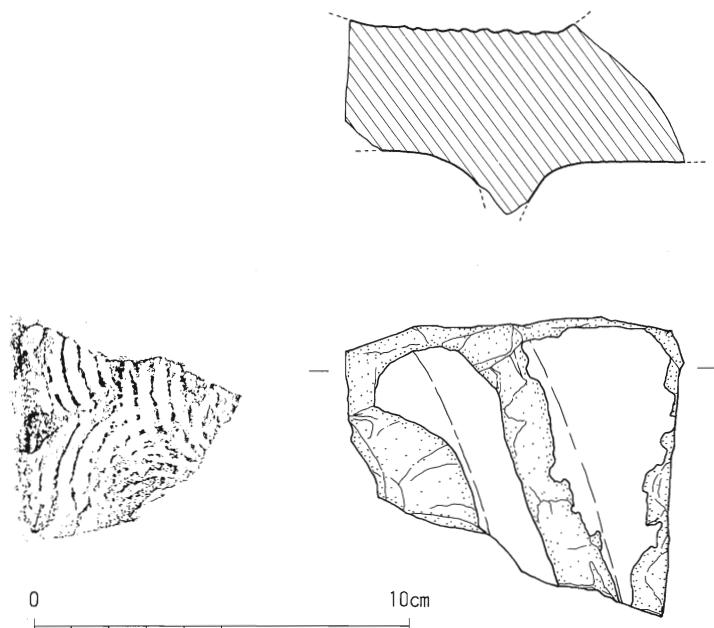
砥石（第21図-32）長さ25cm、断面六角形のもので、6面が使用され、使用面には滑沢がある。

註 内田律雄「西山陰の同紋様系古瓦」『古代』第97号 平成6年 早稲田大学考古学会

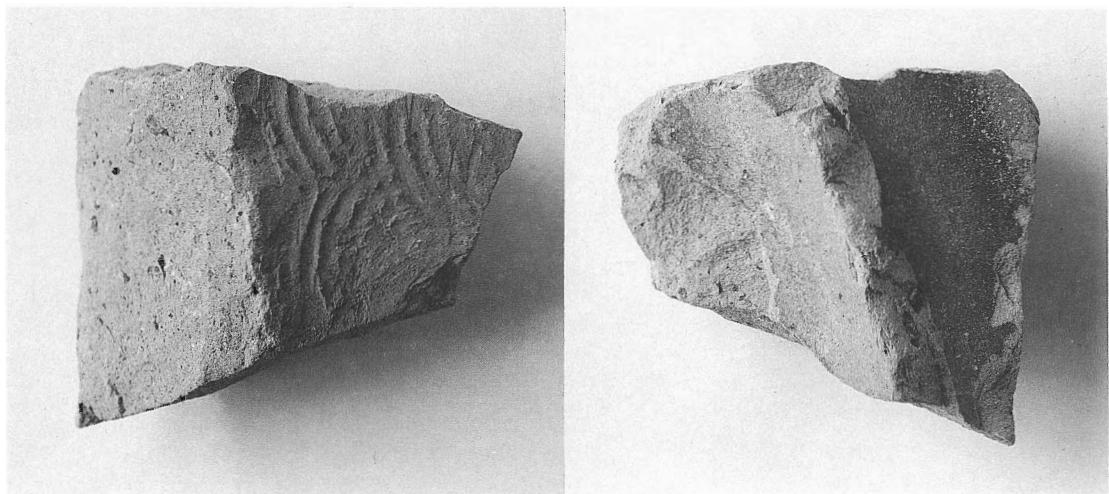
参考文献

島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告V－島根県松江市山代町所在・四王寺跡－』

森郁夫『瓦』考古学ライブラリー43 ニューサイエンス社



第22図 陶製鳴尾実測図（内田律雄氏の原図による）



陶製鳴尾

4. 結 び

検出した遺構は近世以降の土留めの杭列のみである。遺構以外には乃木礫層とその上に乗った粘土層の地山面で自然流路4本が検出された。

遺物は遺物包含層と地山上、自然流路1・2内で布目瓦、近世瓦、須恵器、土師器、土師質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器等が大量に出土している。

流路1は近世の流れ込みにより形成されたもの、流路2は12世紀以降の遺物が確認されていないので中世に埋没したものと考えられる。流路3・4は遺物が皆無であるが土質が非常に硬くかなり古い時期の堆積であろう。第4層の茶褐色土は三段にわたってそれぞれがほぼ水平に堆積していること、二段目の南端で土留めの杭列が検出されたことから近世に水田の客土として、近接地おそらくは北東に隣接した台地上の土が持ち込まれたものではないかと考えている。

本遺跡は四王寺跡の南に隣接しており、四王寺関係の遺構の有無が懸念されたが、調査の結果遺構はなく、寺域外であることが判明した。今後四王寺跡の範囲を確定して行く作業の一環となる意義のある調査であったといえよう。

出土遺物について見ると、古墳時代後期の須恵器類が混在しているので、近辺にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

また、山代郷新造院跡関連の調査として特筆すべきことは陶製鷦尾の存在である。来美廃寺の出土例からみて7世紀末頃のものと考えられ、造立時の新造院の屋根を飾っていたものかもしれない。
～8世紀初頭

なお12世紀頃の貿易陶磁器が10点余りも出土していることから、四王寺がこのころまで存続していたか、高価な輸入品入手できる有力豪族の居館が東～北側の低丘陵上にあったのではないかと考えられる。

須 恵 器 観 察 表 (1)

挿図番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第12図-1	須恵器	坏 蓋	流路 2		沈線2条、天井部回転ヘラケズリ	
2	"	坏 蓋	2区茶褐色土	口 径16.0	口縁端部は開き気味に垂下	
3	"	坏 蓋	2区茶褐色土 と地山の界面	つまみ 径 4.2	低い輪状つまみをもつ	
4	"	坏 身	4区茶褐色土	口 径11.2	たちあがりは内傾して伸びる	
5	"	坏 身	2区茶褐色土 と地山の界面	口 径11.1 受部径14.0 器 高 3.9	たちあがりは内傾して伸びる 受部回転ヘラケズリ	
6	"	坏 身	2区茶褐色土	口 径11.2 受部径14.2	たちあがりは内傾して伸びる 底部回転ヘラケズリ	
7	"	高台付坏	4区茶褐色土	底 径 8.4	底部は回転糸切り後回転ナデ	
8	"	高台付坏	1区 碪 中	底 径 9.0	底部は糸切り未調整	
9	"	高台付坏	1区茶褐色土	底 径 8.0	底部は回転ナデ	
10	"	高台付坏	4区茶褐色土	底 径 8.5	底部は回転糸切り	
11	"	坏	2区茶褐色土	口 径13.4	口縁部はわずかにくびれ内側に肥厚する	
12	"	坏	1区茶褐色土	底 径 8.4	底部回転糸切り	
13	"	坏	1区茶褐色土 と地山の界面	底 径 9.6	底部回転糸切り	
14	"	坏	3区茶褐色土 と黒褐色土の 界面	底 径 7.6	底部回転糸切り	
15	"	坏 底部	2区茶褐色土 と地山の界面	底 径 7.8	底部回転糸切り	
16	"	坏 底部	2区土壤内暗 茶褐色砂質土	底 径 5.2	底部回転糸切り、小さな底	
17	"	坏(?)	流路 1	底 径 5.4	底部回転糸切り、小さな底	
18	"	橙明皿	1区地山上礎 中	口 径 9.6 器 高 2.4 底 径 6.0	口縁部は外反する。底部回転糸切り	
19	"	高台付碗	1区茶褐色土	器 高 1.6 底 径14.2	小さく低い高台	内底面に黒漆様のも の付着
20	"		1区 碪 中	胴 部 最大径 9.6	胴部に斜行刺突文、上下に沈線	
21	"		2区半月形落 ち込み内	底 径 5.3	底部糸切り	底外面に『++』の ヘラ記号
22	"	高 坏	1区茶褐色土 と地山の界面	口 径14.4	体部に沈線2条、口縁部はやや外反	
23	"	高 坏	4区東暗灰色 土		三方にすかし	
24	"	高 坏	2区茶褐色土 と地山の界面	口 径21.2	外面にヘラケズリ	
第13-25	"	壺	4区茶褐色土	頸部径 4.4	直口壺か	

須 恵 器 観 察 表 (2)

挿図番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第13-26	須恵器	長頸壺	4区地山直上		肩屈曲部	
27	"	壺	2区茶褐色土と地山の界面	頸部10.2	頸基部に突帯貼り付け	
28	"	壺	4区地山直上	頸部9.0 突帯部分11.2	頸基部に突帯貼り付け	
29	"	壺	1区地山上		肩部に突帯貼り付け	
30	"	壺	1区西壁際茶褐色土と地山界面		胴部に突帯貼り付け、突帯の側に円孔(?)あり	
31	"	壺	3~4区茶褐色と地山の界面		高台が付く、底部静止糸切り	
32	"	壺	1区茶褐色土地山界面	底径8.6	平底	
33	"	底部	2区茶褐色土	底径9.3	平底、底部に糸切り痕	
34	"	底部	1区地山上	底径12.8	平底、底部ナデ	
35	"	底部	第6トレンチ 第3層	底径18.2	平底、底部ナデ	
36	"	鉢	2区茶褐色土と地山の界面		口縁外反、体部外面にハケ目状の痕跡	
37	"	円面硯	1区暗灰色土	陸部径23.6	磨墨面は使用痕顯著、脚部にすかし	
38	"	甕	流路1	口径33.1	外面平行叩き、内面同心円押当具痕	
39	"	甕	3~4区茶褐色土と地山の界面	口径20.0	外面平行叩き、内面同心円押当具痕	
40	"	甕	2区茶褐色土		外面平行叩き、内面同心円押当具痕	
41	"	甕	1区礫層中		外面平行叩き、内面同心円押当具痕	
42	"	甕	1区茶褐色土		外面平行叩き、内面刻み目のある同心円押当具痕	
43	"	甕	2区茶褐色土		退化した波状文	
44	"	甕	2区茶褐色土		退化した波状文	
45	"	甕	茶褐色土と地山の界面		波状文と平行線文、口縁部屈曲当具痕	
46	中世須恵器	甕	流路1、暗褐色土~地山	厚み 1.1~1.3	外面粗い格子叩き、内面ナデとカキ目	亀山焼系
47	"	甕	1区茶褐色土と地山の界面	厚み 0.9~1.0	外面格子叩き、内面ナデ	"

土師器・土師質土器観察表

挿図番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第15図-1	土師質土器	坏底部	2区(地山) 礫中	底径 6.6	底部回転糸切り	
2	"	"	3区茶褐色土	底径 4.4	底部回転糸切り	
3	"	"	4区地山直上	底径 4.4	底部回転糸切り	
4	"	底部	2区土壤内暗茶 褐色砂質土	底径 8.0	『ハ』の字に開く高台	
5	"	台付皿(?)	2区茶褐色土 と地山の界面	底径 4.6		風化
6	"	台付皿	2区土壤内暗 茶褐色砂質土	底径 4.6	底部に回転糸切り痕	
7		カマド片	1区茶褐色土 と地山の界面		たき口の一部	
8	土師器	把手	1区茶褐色土 と地山の界面		瓶か甕の把手	
9	瓦質	脚	流路1内		ヘラミガキ	灰~黒色

貿易陶磁器観察表

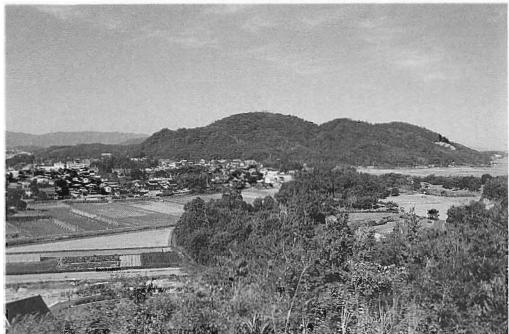
挿図番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第16図-1	白磁	碗	3区流路2地山上	口径 16.2	口縁は大きめの玉縁につくる	白磁碗Ⅳ類
2	"	碗	2~3区流路2内 暗茶褐色土	口径 16.2	口縁は大きめの玉縁につくる	" Ⅳ類
3	"	碗	1区茶褐色土	口径 14.6	口縁は大きめの玉縁につくる	" Ⅳ類
4	"	碗	3区茶褐色土	口径 14.2	口縁は大きめの玉縁につくる	" Ⅳ類
5	"	碗	3区茶褐色土	底径 6.9	底部のけずりこみは浅い	" Ⅳ類底部
6	"	碗	4区茶褐色土	底径 7.8	細い高台、見込みに段あり	" Ⅴ類底部
7	"	碗	2区茶褐色土と 地山の界面		見込みの釉を蛇の目状にかきとる	" Ⅷ類
8	"	碗	3区流路2地山上	口径 13.8	口縁端部外反、外面に片切彫の菊花文	" Ⅺ類
9	"	皿	3区茶褐色土	底径 5.1	内面施釉、外面無釉	白磁皿Ⅱ類
10	"	皿	1区茶褐色土と 地山の界面	底径 4.0	見込みに段、底部は高台状に小さく 削り出す。内面に花文	" Ⅶ-1・b類
11	"	皿	2区茶褐色土と 地山の界面	底径 4.6	底部無釉	" Ⅷ-1類
12	陶器	壺類	3区 流路2内地山上	胴部 最大径25.4	胎土は淡褐色、釉は黄褐色を呈す	胎土に黒粒含
写真図版5	青磁	盤	1区茶褐色土			龍泉14C以降

国産陶磁器観察表

挿図番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第17図—1	焼締陶器	壺	1区茶褐色土と地山の界面	底径 12.4	底面は凹凸が激しい	備前焼
2	陶器	瓶	1区東暗灰色土		釉は暗緑色	唐津系
3	"	碗	北壁 暗灰色粘質土	底径 4.0	釉は暗緑色、底部は無釉	"
4	"	皿	2区地山上	口径 11.2	釉は灰色を帯びた淡褐色 底部は無釉	"
5	"	片口鉢	1区茶褐色土と地山の界面	口径 25.2	釉は灰色がかかった褐色	"
6	"	皿	流路1、暗灰色土～地山	底径 4.8	砂目、溝縁皿か	"
7	"	皿	1区茶褐色土と地山の界面	底径 5.2	砂目、溝縁皿か	"
8	"	皿	1区流路1内 暗灰色粘性土	底径 4.2	砂目、釉は暗黄色	"
9	"	碗	流路1、暗灰色土～地山	底径 4.6	底部無釉、釉は青みを帯びた淡黄灰色	"
10	"	碗	1区暗灰色土	底径 5.4	疊付のみ釉をかきとる。釉は淡黄色	産地不明
11	"	擂鉢	1区排水路 1区暗灰色土(礫群の上)	口径 36.0	内面には12本单位条線	唐津系
12	"	擂鉢	3区東溝中暗茶褐色土	底径 11.6	内面には12本单位の条線。 底部糸切り	"
13	"	碗	流路1、暗灰色土～地山	底径 5.0	陶胎染付	長崎木原唐津
14	"	碗	1区 暗灰色土	底径 5.2	陶胎染付	"
15	磁器	碗	2区暗灰色土	底径 4.0	染付、網目模様	伊万里系
16	"	碗	4区 暗灰色土	口径 7.9	染付	伊万里系
17	"	碗	口径 8.6		染付	伊万里系
18	"	皿	底径 4.2		染付、見込みを蛇の目状に釉ハギ	黒漆状のもの付着
19	白磁	皿	3～4区暗灰色土	底径 4.6	見込みを蛇の目釉ハギ、底部無釉	伊万里焼
20	青磁	鉢	2～3区 暗灰色土	底径 8.9	底部は、糸切り後削り出す 釉は薄く、緑褐色を呈す	国産、底部に圧痕 痕跡アリ
21	"	瓶	1区 東暗灰色土	底径 6.9	底部は回転糸切り 釉は淡青緑色	産地、時期共不明
22	陶器	擂鉢	3区暗灰色土	底径 12.2		布志名焼系
23	"	擂鉢	1区 暗灰色土		底径 12.2	布志名焼系
24	磁器	皿	2区暗灰色土	口径 10.6 器高 2.35	染付、内面梅文、外面唐草文、『福』の底裏銘あり	伊万里焼

瓦観察表

挿図番号	種類	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第18図-1	軒丸瓦	第1流路内		外区内縁に珠文	四王寺 I類軒丸瓦
2	"	2区茶褐色土と地山の界面		単弁四葉蓮華文	" II類軒丸瓦
3	"	3区茶褐色土		"	" II類軒丸瓦
4	"	2区暗灰色土		"	" II類軒丸瓦
5	軒平瓦	2区茶褐色土		外区の珠文、内区に唐草文 山形の中心飾り、段頸	" I類軒平瓦
6	"	2区茶褐色土	瓦当面 の高さ 6.2	外区は素文、内区はI類に同じ ゆるい曲線顎	" II類軒平瓦
7	"	3区茶褐色土		外区は素文、内区はI類に同じ 曲線顎	" II類軒平瓦
8	"	第2流路内		外区は素文、内区はI類に同じ 平瓦部凹面に布目	" II類軒平瓦
9	"	2区暗灰色土	瓦当面 の高さ 5.9	外区素文、内区I類に同じ 平瓦部凹面凸面共ヘラケズリ	" II類軒平瓦
10	"	2区茶褐色土と地山の界面		外区素文、内区I類の同じ。焼成不良	" II類軒平瓦
11	"	1区地山上礫中		外区素文、内区I類に同じ 平瓦部凸面共ヘラケズリ	" II類軒平瓦
12	"	2区茶褐色土と地山の界面		外区素文、内区I類に同じ 焼成やや不良	" II類軒平瓦
13	"	1区暗灰色土	瓦当面 の高さ6.5 上弦巾30.0	外区素文、内区I類に同じ 曲線、日田瓦部凹面凸面ヘラケズリ	" II類軒平瓦
第19図-14	丸瓦	1区茶褐色土と地山界面	厚さ 1.6	凹面布目痕、凸面繩目の叩き残る	行基式
15	"	4区3層暗褐色土小礫混	厚さ 1.5	"	
16	"	1区茶褐色土と地山界面	厚さ 1.6	" "	
17	平瓦	1区茶褐色土	厚さ 2.1	凹面布目、凸面斜格子叩き	
18	"	1区茶褐色土と地山界面	厚さ 1.9	" "斜格子(浅い)叩き	
19	"	2区不整形落ち込み内	厚さ 2.0	" "斜格子叩き	
20	"	1区流路1、暗灰色粘質土	厚さ 2.1	凹面布目、凸面斜格子叩き	
21	"	2区茶褐色土と地山界面	厚さ 2.1	" "平行線+斜線叩き	凹面…離れ砂 凸面…粘土塊 (砂少量付着)
22	"	1区茶褐色土と地山の界面	厚さ 2.2	凹面布目、凸面平行線+斜線叩き	
第20図-23	"	2区茶褐色土	厚さ 2.2	" 凸面繩目平行線+斜線叩き	
24	"	2区茶褐色土	厚さ 1.5	" "	離れ砂
25	"	2区茶褐色土	厚さ 2.0	" "	"
26	"	2区茶褐色土	厚さ 2.2	" "	
27	"	1区暗褐色土と地山界面	厚さ 2.4	" "	離れ砂
第21図-28	熨斗瓦	流路2、茶褐色土と黒褐色	厚さ 2.2	糸切り痕	
29	"	2区茶褐色土	厚さ 2.0	" "	
30	"	1区東、暗灰色土	厚さ 1.6	" "	風化著しい
31	"	1区茶褐色土	厚さ 1.6	" "	"
第22図	鷦尾	1区茶褐色土と地山の界面	縦7.5×横9.0 残存 厚さ 3.5	縦帶付近の破片須恵質に焼成 鰯部、胴部ナデ、内面青海波文叩き	



調査地の遠景（かんべの里より茶臼山をのぞむ）



調査地近景（北から）



盛土除去後



自然流路1検出状況



杭列



杭列付近の土層



同 上

図版 2



自然流路 1 遺物出土状態



自然流路 1 と礫群



自然流路 1 付近の土層



自然流路 2



礫群



調査風景



同 上



茶褐色土層遺物出土状態



自然流路 3



調査後全景（北から）



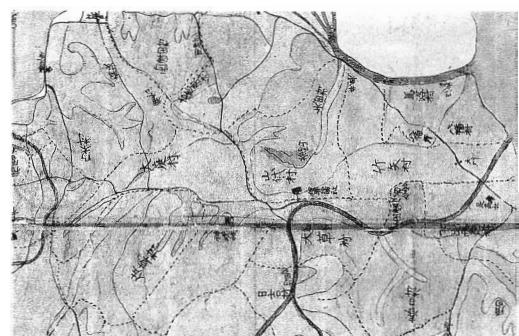
自然流路 4



調査指導会

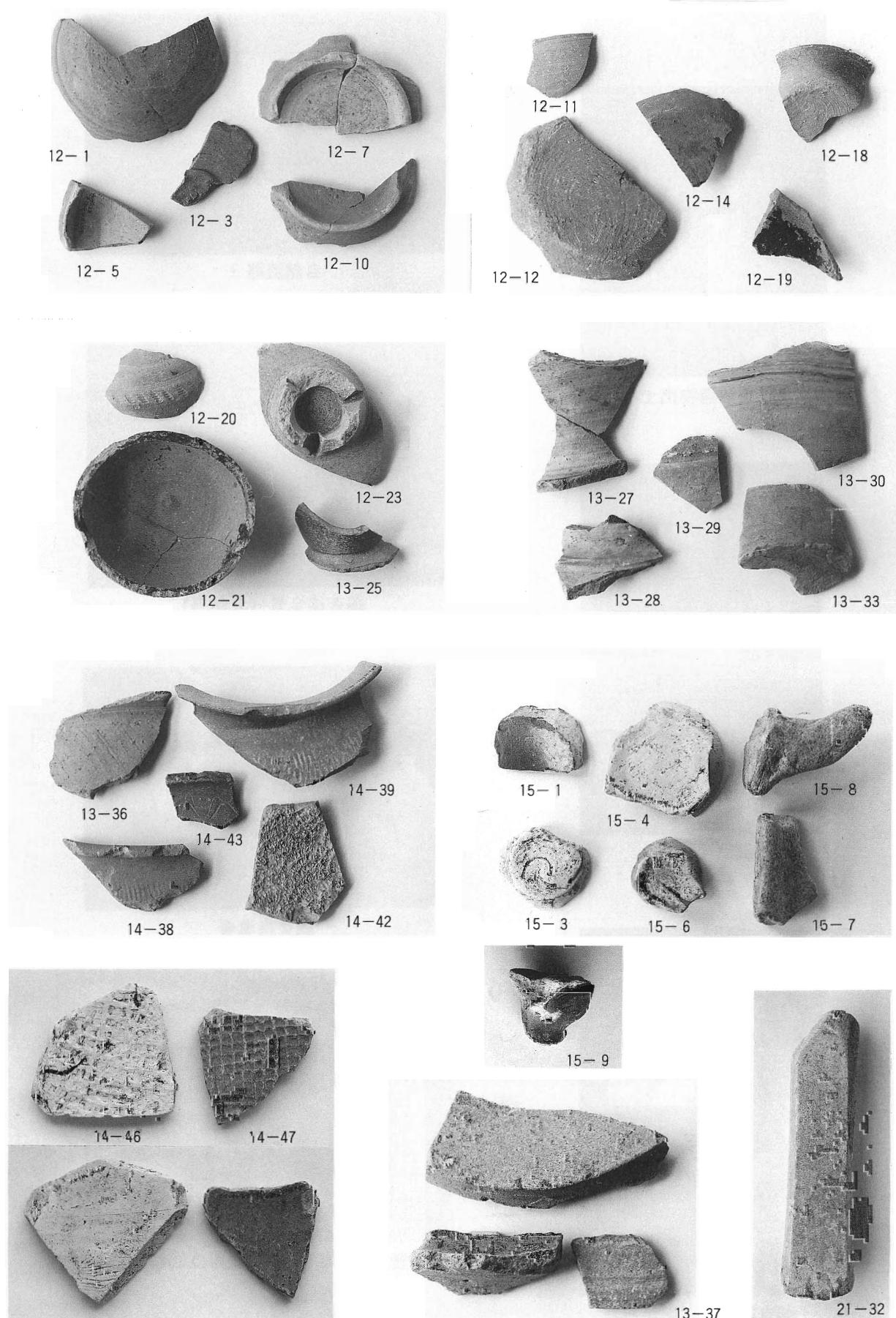


調査後全景（南から）



「出雲国十郡絵図」(島根県立図書館蔵)

図版 4



須恵器・土師器・土師質土器・その他

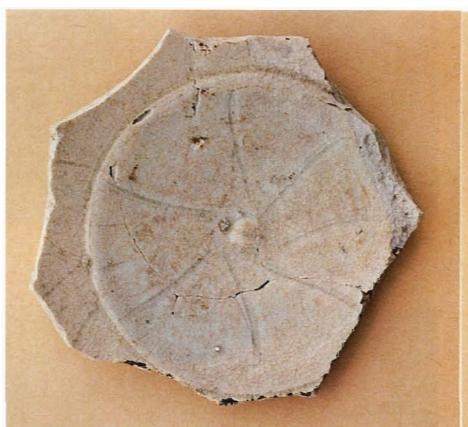
図版 5



16-1



16-8



16-10



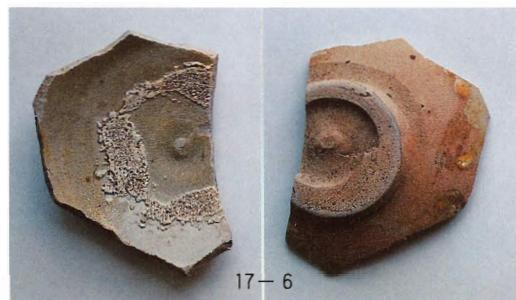
16-11



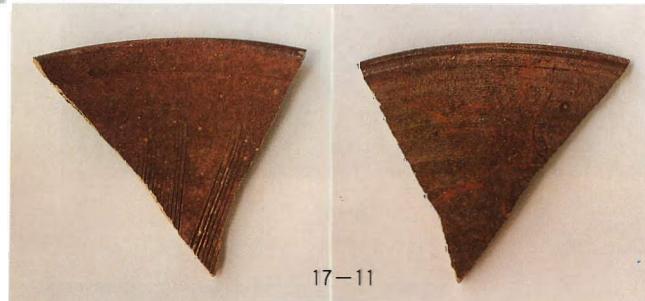
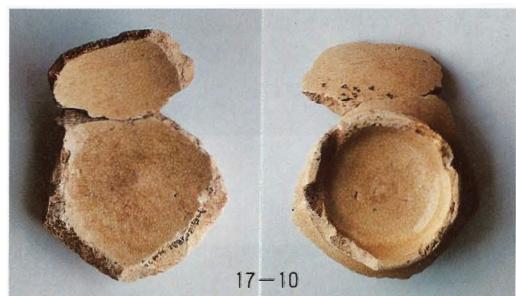
青磁盤



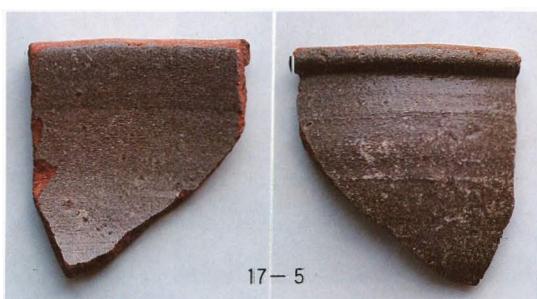
16-12



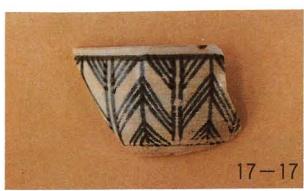
備前徳利

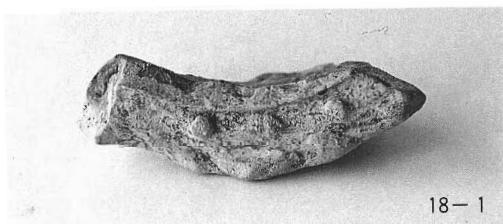


17-2

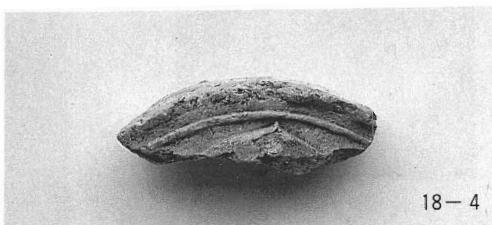


国産陶磁器(1)

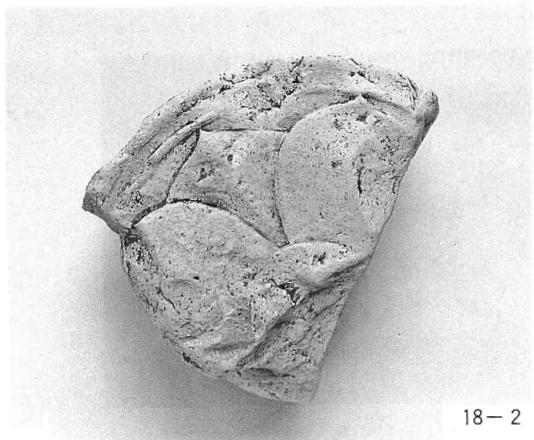




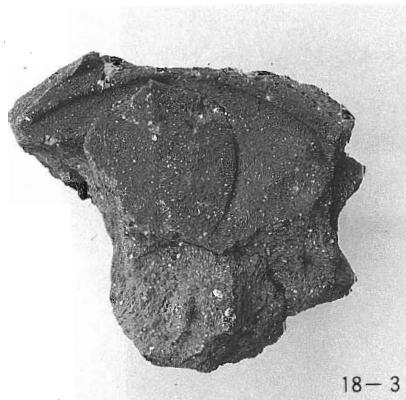
18-1



18-4



18-2



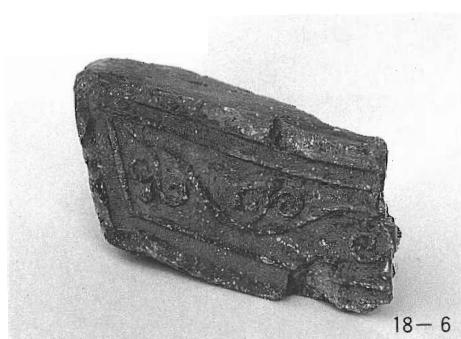
18-3



18-5



18-7



18-6



18-9



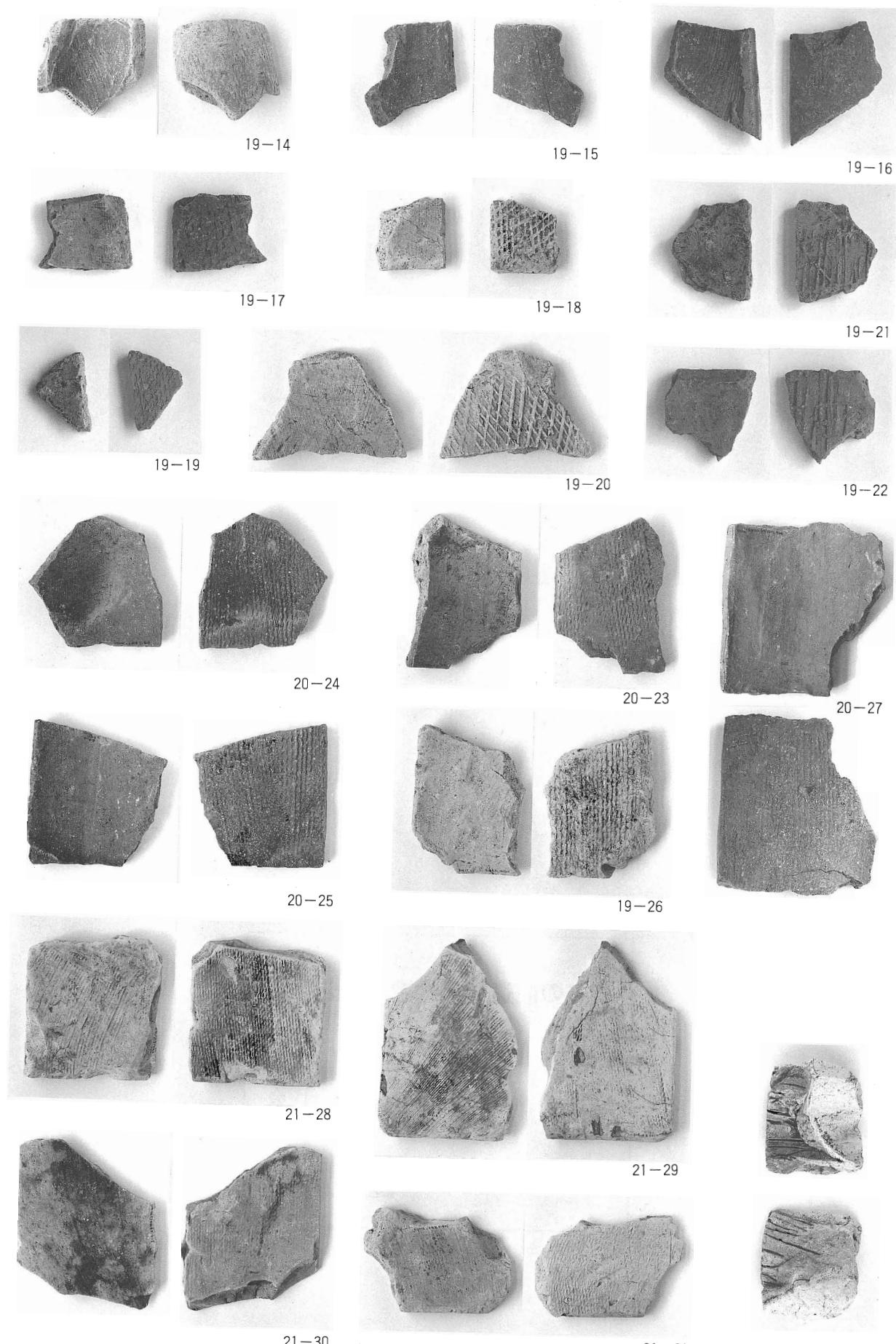
18-13



18-12

軒瓦

図版 9



丸瓦・平瓦・熨斗瓦

21-31

寺の前遺跡発掘調査報告書

1995年3月

発行 松江市教育委員会
財松江市教育文化振興事業団

印刷 有限会社 高浜印刷所
松江市北堀町8